

あのときの王子くん
(アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ)

レオン・ウェルトに



子どものみなさん、ゆるしてください。ぼくはこの本をひとりのおとなのひとにささげます。でもちゃんとしたわけがあるのです。そのおとなのひとは、ぼくのせかいでいちばんの友だちなんです。それにそのひとはなんでもわかるひとで、子どもの本もわかります。しかも、そのひとはいまフランスにいて、さむいなか、おなかをへらしてくるしんでいます。心のささえがいますのです。まだいいわけがほしいのなら、このひともまえは子どもだったので、ぼくはその子どもにこの本をささげることになります。おとなはだれでも、もとは子どもですよ。（みんな、そのことをわすれますけど。）じゃあ、ささげるひとをこう書きなおしましょう。

(かわいい少年だったころの)

レオン・ウェルトに

う。
V
△星から出るのに、その子はわたり鳥をつかったんだとおも

ぼくが6つのとき、よんだ本にすばらしい絵があった。『ぜんぶほんとはなし』という名まえの、しぜんのままの森に

ついて書かれた本で、そこに、ボアという大きなヘビがケモノをまるのみしようにするところがえがかれていたんだ。だいたいこういう絵だった。

「ボアというヘビは、えものをかまわずにまるのみします。そのあとはじつとおやすみして、6か月かけて、おなかのなかでとかります。」と本には書かれていた。

そこでぼくは、ジャングルではこんなこともおこるんじゃないか、とわくわくして、いろいろかんがえてみた。それから色えんぴつで、じぶんなりの絵をはじめてかいてやった。さくひんばんごう1。それはこんなかんじ。



ぼくはこのけっさくをおとなのひとに見せて、こわいでしょ、ときいてまわった。

でもみんな、「どうして、ぼうしがこわいの？」っていうんだ。

この絵は、ぼうしなんかじゃなかった。ボアがゾウをおなかのなかでとかしている絵だった。だから、ぼくはボアのなかみをかいて、おとなのひ



ともうまくわかるようにした。あのひとたちは、いつもはつきりしてないとだめなんだ。さくひんばんごう2はこんなかんじ。



おとなのひとは、ボアの絵なんてなかが見えても見えなくてもどうでもいい、とにかく、ちりやれきし、さんすうやこくごのべんきょうをしなさいと、ぼくにいいつけた。というわけで、ぼくは6さいで絵かきになるゆめをあきらめた。さくひんばんごう1と2がだめだったから、めげてしまったんだ。おとなのひとはじぶんではまったくなにもわからないから、子どもはくたびれてしま

う。いつもいつもはつきりさせなきゃいけない。それでぼくはししぶべつのしごとにきめて、ひこうきのそうじゅうをおぼえた。せかいじゅうをちよつととびまわった。ちりをべんきょうして、ほんとやくに立った。ひとめで中国なのかアリゾナなのかがわかるから、夜なかにとんでまよっても、かなりたすかるってもんだ。

こうしてぼくは生きてきて、ちゃんとしたひとたちともおぜいであつてきた。おとなのひとのなかでくらしてきた。ちかくでも見られた。でもそれでなにかいいことがわかったわけでもなかった。

すこしかしこそうなひとを見つけると、ぼくはいつも、とっておきのさくひんばんごう1を見せてみることにしていた。ほんとうのことがわかるひとなのか知れたかったから。でもかえってくるのは、きまって「ぼうしだね。」って。そ

ういうひとには、ボアのこと、しぜんの森のこと、星のこと、もしやべらない。むこうに合わせて、トランプやゴルフ、せいじやネクタイのことをしゃべる。するとおとなのひとは、ものごとがはつきりわかっているひととおちかづきになれて、とてもうれしそうだった。

2

それまで、ぼくはずっとひとりぼっちだった。だれともうちとけられないまま、6年まえ、ちょっとおかしくなつて、サハラさばくに下りた。ぼくのエンジンのなかで、なにかがこわれていた。ぼくには、みてるくれるひと、おきやくさんもないかったから、なおすのはむずかしいけど、ぜんぶひとりでなんとかやってみることにした。それでぼくのいのちがきまってしまう。のみ水は、たった7日ぶんしかなかった。

1日めの夜、ぼくはすなの上でねむった。ひとのすむところは、はるかかなただった。海のどまんなか、いかだでさまよっているひとよりも、もっとひとりぼっち。だから、ぼくがびっくりしたのも、みんなわかつてくれるとおもう。じつは、あさ日がのぼるころ、ぼくは、ふしぎなかわいいこえでおこされたんだ。

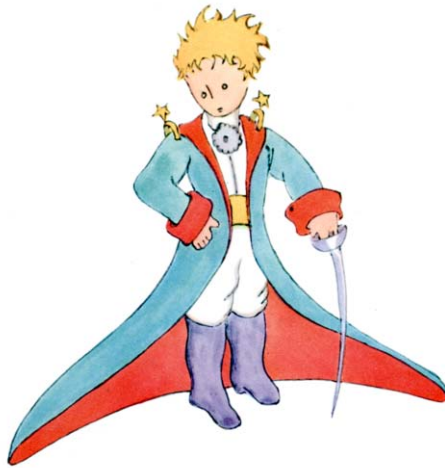
「ごめんください……ヒツジの絵をかいで！」

「えっ？」

「ぼくにヒツジの絵をかいで……」

かみなりにうたれたみたいに、ぼくはとびおきた。目をこ

しごしこすつて、ぱっちりあけた。すると、へんてこりんなおとこの子がひとり、おもいつめたようすで、ぼくのことをじっと見ていた。あとになって、この子のすがたを、わりとうまく絵にかいてみた。でもきつとぼくの絵は、ほんもののみりよくにはかなわない。ぼくがわるいんじゃない。六さいのとき、おとなのせいで絵かきのゆめをあきらめちゃったから、それからずっと絵にふれたことがないんだ。なかの見えるボアの絵と、なかの見えるボアの絵があるだけ。



へあとになって、この子のすがたを、わりとうまく絵にかいてみた。▽

それはともかく、いきなりひとが出てきて、ぼくは目をまろくした。なにせひとのすむところのはるかかなたにいたん

だから。でも、おとこの子はみちをさがしているようには見えなかった。へとへとにも、はらぺこにも、のどがからからにも、びくびくしているようにも見えなかった。ひとのすむところのはるかかなた、さばくのどまんなかで、まい子になっっている、そんなかんじはどこにもなかった。

やっとのことで、ぼくはその子にこえをかけた。

「えっと……ここでなにをしてるの？」

すると、その子はちゃんとつたえようと、ゆっくりとくりかえした。

「ごめんください……ヒツジの絵をかいで……」

ものすごくふしぎなのに、だからやってしまうことってある。それでなんだかよくわからないけど、ひとのすむところのはるかかなたで死ぬかもしれないのに、ぼくはポケットから1まいのかみとペンをとりだした。でもそういえば、ぼくはちりやれきし、さんすうやごくごくぐらいしかならっていないわけなので、ぼくはそのおとこの子に（ちよつとしょんぼりしながら）絵ごころがないんだ、というと、その子はこうこたえた。

「だいじょうぶ。ぼくにヒツジの絵をかいで。」

ヒツジをかいだことがなかったから、やっぱり、ぼくのかけるふたつの絵のうち、ひとつをその子にかいでみせた。なかの見えないボアだった。そのあと、おとこの子のことばをきいて、ぼくはほんとうにびっくりした。

「ちがうよ！ ボアのなかのゾウなんてほしくない。ボアはとってもあぶないし、ゾウなんてでっかくてじゃまだよ。ぼ

くんち、すごくちいさいんだ。ヒツジがいい。ぼくにヒツジをかいで。」

なので、ぼくはかいだ。



それで、その子は絵をじつとみつめた。

「ちがう！ これもう、びょうきじゃないの。もういっかい。」
ぼくはかいでみた。



ぼうやは、しょうがないなあというふうにわらった。

「見てよ……これ、ヒツジじゃない。オヒツジだ。ツノがあるもん……」

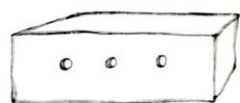
ぼくはまた絵をかきなおした。



だけど、まえのおなじで、だめだといわれた。

「これ、よぼよぼだよ。ほしいのは長生きするヒツジ。」
もうがまんできなかった。はやくエンジンをばらばらにし

ていきたかったから、さっとこういう絵をかいだ。



ぼくはいつてやった。

「ハコ、ね。きみのほしいヒツジはこのなか。」

ところがなんと、この絵を見て、ぼくのちいさなしんさいくんは目をきらきらさせたんだ。

「そう、ぼくはこういうのがほしかったんだ！ このヒツジ、草いっぱいいるかなあ？」

「なんで？」

「だって、ぼくんち、すぐちいさいんだもん……」

「きつとへいきだよ。あげたのは、すぐちいさなヒツジだから。」

その子は、かおを絵にちかづけた。

「そんなにちいさくないよ……あ！ ねむっちゃった……」

ぼくがあのとときの王子くんであったのは、こういうわけなんだ。

3

その子がどこから来たのか、なかなかわからなかった。ま

さに気ままな王子くん、たくさんものをきいてくるわりには、こっちのことにはちつとも耳をかさない。たまたま口からでたことばから、ちよつとずつ見えてきたんだ。たとえば、ぼくのひこうきをはじめて目にしたとき（ちなみにぼくのひこうきの絵はかかない、ややこしすぎるから）、その子はこうきいてきた。「このおきもの、なに？」

「これはおきものじゃない。とぶんだ。ひこうきだよ。ぼくのひこうき。」

ぼくはとぶ、これがいえて、かなりとくいげだった。すると、その子は大きなこえでいった。

「へえ！ きみ、空からおつこちたんだ！」

「うん。」と、ぼくはぼつがわるそうにいった。

「ぶっ！ へんなの……！」

この気まま王子があまりにからからとわらうので、ぼくはほんとにむかついた。ひどい目にあつたんだから、ちゃんとしたあつかいをされたかった。それから、その子はこうつぶけた。

「なあんだ、きみも空から来たんだ！ どの星にいるの？」

ふと、その子のひみつにふれたような気がして、ぼくはとつさにききかえした。

「それって、きみはどこかべつの星から来たってこと？」

でも、その子はこたえなかった。ぼくのひこうきを見ながら、そつとくびをふった。

「うーん、これだと、あんまりとおくからは来てないか……」

その子はしばらくひとりで、あれこれとぼんやりかんがえ

ていた。そのあとポケットからぼくのヒツジをとりだして、
そのたからものをくいいるようにじっと見つめた。



みんなわかってくれる
とおもうけど、その子が
ちよつとおわせたへべつ
の星Vのことが、ぼくはす
ごく気になった。もつと
くわしく知ろうとおもっ
た。

「ぼうやはどこから来たの？　へぼくんちVってどこ？　ヒ
ツジをどこにもっていくの？」

その子はこたえにつまって、ぼくにこういうことをいった。
「よかった、きみがハコをくれて。よる、おうちがわりにな
るよね。」

「そうだね。かわいがるんなら、ひるま、つないでおくため
のロープをあげるよ。それと、ながいぼうも。」

でもこのおせっかいは、王子くんのお気にめさなかったみ
たいだ。

「つなぐ？　そんなの、へんなかんがえ！」

「でもつないでおかないと、どこかに行っちゃって、なくし
ちゃうよ。」

このぼうやは、またからからとわらいだした。

「でも、どこへ行くっていうの！」

「どこへでも。まっすぐまえとか……」

すると、こんどはこの王子くん、おもいつめたようすで、
こうおっしゃる。

「だいじょうぶ、ものすごおくちいさいから、ぼくんち。」

それから、ちよつときみしそうに、こういいそえた。
「まっすぐまえにすすんでも、あんまりとおくへは行けない
……」



へしようわ
くせいB6
12の王子
くん。V

4

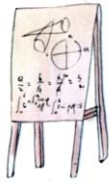
こうして、だいじなことがもうひとつわかった。なんと、
その子のすむ星は、いっけんのいえよりもちよつと大きいだ
けなんだ！

といつても、大げさというほどのことでもない。ごぞんじ
のとおり、ちきゅう、もくせい、かせい、きんせいみたいに
名まえのある大きな星のほかに、ぼうえんきょうでもたまに

しか見えないちいさなもの、なん100ばいとある。たとえばそういったものがひとつ、星はかせに見つかる、ばんごうでよばれることになる。へしろうくせい325Vというかんじで。

ちゃんとしたわけがあって、王子くんおすまいの星は、しろうくせいB612だと、ぼくはおもう。前にも、1909年に、ぼうえんきょうをのぞいていたトルコの星はかせが、その星を見つけている。

それで、せかい星はかせかいぎ、というところで、見つけたことをきちんとはつぴょうしたんだけど、みにつけているふくのせいで、しんじてもらえなかった。おとなのひとつ、いつもこんなふうだ。



んうんとうなずいた。

でも、しろうくせいB612はうんがよくて、そのときのいちばんえらいひとが、みんなにヨーロッパのふくをきないと死けいだぞ、というおふれを出した。1920年にそのひとは、おじょうひんなめしもので、はつぴょうをやりなoshた。するとこんどは、どこもだれもがう

こうやって、しろうくせいB612のことをいちいちったり、ばんごうのはなしをしたりするのは、おとなのためなんだ。おとなのひとは、すうじが大すきだ。このひとたちに、あたらしい友だちができたよといっても、なかみのあることはなにひとつきいてこないだろう。つまり、「その子のこえてどんなこえ？ すきなあそびはなんなの？ チョウチョコはあつめてる？」とはいわずに、「その子いくつ？ なんにんきょうだい？ たいじゅうは？ お父さんはどれだけかせぐの？」とかきいてくる。

それでわかったつもりなんだ。おとなのひとに、「すつごいいえ見たよ、ばら色のレンガでね、まどのそばにゼラニウムがあつてね、やねの上にもハトがたくさん……」といったところで、そのひとたちは、ちつともそのいえのことをおもいえがけない。こういわなくちゃ。「10まんフランのいえを見ました。」すると「おおすばらしい！」とかいうから。

だから、ぼくがそのひとたちに、「あのときの王子くんがいたっていいきれるのは、あの子にはみりよくがあつて、わらって、ヒツジをおねだりしたからだ。ヒツジをねだったんだから、その子がいたっていいきれるじゃないか。」とかいっても、なにいつてるの、と子どもあつかいされてしまう！でもこういつたらどうだろう。「あの子のすむ星は、しよ



うわくせいB612だ。」そうしたらなっとくして、もんくのひとつもないわいだらう。おとなってこんなもんだ。うらんじやいけない。おとなのひとに、子どもはひろい心をもたなくちゃ。

でももちろん、ぼくたちは生きることがなんなのかよくわかってから、そう、ばんごうなんて気にしないよね！できるなら、このおはなしを、ぼくはおとぎばなしふうにはじめたかった。こういえたらよかったのに。

「むかし、気ままな王子くんが、じぶんよりちよつと大きめの星にすんでいました。その子は友だちがほしくて……」生きるってことをよくわかってるひとには、こっちのほうが、ずっともっともらしいとおもう。

というのも、ぼくの本を、あまりかるがるしくよんでほしくないんだ。このおもいでをはなすのは、ともしんどいことだ。6年まえ、あのぼうやはヒツジといっしょにいないかってしまった。ここにかこうとするのは、わすれたくないからだ。友だちをわすれるのはつらい。いつでもどこでもだれでも、友だちがいるわけではない。ぼくも、いつ、すうじの大すきなおとなのひとになってしまうともかぎらない。だからそのためにも、ぼくはえのぐとえんぴつをひとケース、ひさしぶりにかった。この年でまた絵をかくことにした。さいごに絵をかいたのは、なかの见えないボアとなかの見えるボアをやってみた、六さいのときだ。あたりまえだけど、なるべくそっくりに、あの子のすがたをかくつもりだ。うまくかけるじしんなんて、まったくない。ひとつかけても、もうひ

とつはぜんぜんだめだとか。大きさもちよつとまちがってるとか。王子くんがものすごくでかかったり、ものすごくちっちゃかったり。ふくの色もまよってしまふ。そうやってあれやこれや、うまくいったりいかなかったりしながら、がんばった。もつとだいじな、こまかいところもまちがってるとおもう。でもできればおおめに見てほしい。ぼくの友だちは、ひとつもはつきりしたことをいわなかった。あの子はぼくを、にたものどうしだとおもっていたのかもしれない。でもあいにく、ぼくはハコのなかにヒツジを見ることができない。ひよつとすると、ぼくもちよつとおとなのひとなのかもしれない。きつと年をとったんだ。

5

日に日にだんだんわかってきた。どんな星で、なぜそこを出るようになって、どういうたびをしてきたのか。どれも、とりとめなくしゃべっていて、なんとなくそういう話になったんだけど。そんなふうにして、3日めはバオバブのこわい話をきくことになった。このときもヒツジがきっかけだった。この王子くんはふかいなやみでもあるみたい、ふいにきてきたんだ。

「ねえ、ほんとなの、ヒツジがちいさな木を食べるっていうのは。」

「ああ、ほんとだよ。」

「そう！ よかった！」

ヒツジがちいさな木を食べるってことが、どうしてそんなにだいじなのか、ぼくにはわからなかった。でも王子くんはそのままつづける。

「じゃあ、バオバブも食べる？」



ぼくはこの王子くんにおしえてさしあげた。バオバブっていうのはちいさな木じゃなくて、きょうかいのたてもものぐらい大きな木で、そこにゾウのむれをつれてきて、たった1本のバオバブも食べきれやしないんだ、って。ゾウのむれっていうのを、王子くんはおもしろがって、

「ゾウの上に、またゾウをのせなきゃ……」

といいつつも、いうことはしっかりいかえしてきた。

「バオバブも大きくなるまえ、もとは小さいよね。」

「なるほど！ でも、どうしてヒツジにちいさなバオバブを食べてほしいの？」

するとこういうへんじがかえってきた。「え！ わかんないの！」あたりまえだといわんばかりだった。ひとりですいぶんあたたまをつかったけど、ようやくこういうことなのかなとくできた。

つまり、王子くんの星も、ほかの星もみんなそうなんだけど、いい草とわるい草がある。とすると、いい草の生えるいいタネと、わるい草のわるいタネがあるわけだ。でもタネは目に見えない。土のなかでひっそりねむっている。おきても

いいかかって気になると、のびていって、まずはお日さまにむかって、むじゃきでかわいいそのめを、おずおずと出していくんだ。ハツカダイコンやバラのめなら、生えたままにすればいい。でもわるい草や花になると、見つけしだいすぐ、ひっこぬかないといけない。そして、王子くんの星には、おそろしいタネがあったんだ……それがバオバブのタネ。そのために、星のじめんのなかには、めちやくちやになった。しかも、たった一本のバオバブでも、手おくれになると、もうどうやってもとりのぞけない。星じゅうにはびこって、根っこで星にあなをあけてしまう。それで、もしその星がちいさくて、そこがびつしりバオバブだらけになってしまえば、星はばくはつしてしまふんだ。

「きっちりしてるかどうかだよ。」というのは、またべつのかの、王子くんのおことば。「あさ、じぶんのみだしなみがおわったら、星のみだしなみもていねいにすること。ちいさいときはまぎらわしいけど、バラじゃないってわかったじんで、バオバブをこまめにひきぬくようにすること。やらなきゃいけないのは、めんどろといえばめんどろだけど、かんとんといえばかんとんなんだよね。」

またある日には、ひとつ、ぼくんとこの子どもたちがずっとわすれないような、りっぱな絵をかいてみないかと、ぼくにもちかけてきた。その子はいうんだ。「いつかたびに出たとき、やくに立つよ。やらなきゃいけないことを、のばしのばしにしてると、ときどきぐあいのわるいことがあるよね。」



それがバオバブだったら、
ぜったいひどいことになる。
こんな星があるんだ、
そこにはなまけものがすん
でて、ちいさな木を3本ほ
うっておいたんだけど：

「……」
というわけで、ぼくは王
子くんのおおせのまま、こ
こにその星をかいだ。えら
そうにいうのはきらいなん

だけど、バオバブがあぶないってことはぜんぜん知られてな
いし、ひとつの星にいて、そういうことをかるくかんがえて
いると、めちやくちやきけんことになる。だから、めずら
しく、おもいきっていうことにする。いくよ、「子どものみ
なさん、バオバブに気をつけること！」これは、ぼくの友だ
ちのためでもある。そのひとたちはずっとまえから、すぐそ
ばにきけんがあるのに気がついてない。だからぼくは、ここ
にこの絵をかかなきゃいけない。ここでいましめるだけのね
うちがある。そう、みんなはこんなことをふしぎにおもうか
もしれない。「どうしてこの本には、こういう大きくてりっ
ぱな絵が、バオバブの絵だけなんですか？」こたえはとって
もかんたん。やってみただけ、うまくいかなかった。バオバ
ブをかいだときは、ただもう、すぐにやらなきゃって、いっ

しょうけんめいだったんだ。



へバオバブ
の木。v

6

ねえ、王子くん。こんなふうに、ちよつとずつわかってき



日めのあさ、そのとき、きみはぼくにいった。

たんだ。きみがさ
みしく、ささやか
に生きてきたって。
ずっときみには、
おだやかな夕ぐれ
しか、いやされる
ものがなかった。
このことをはじめ
て知ったのは、4

「タぐれが大すきなんだ。タぐれを見にいこう……」

「でも、またなきや……」

「なにをまつの？」

「タぐれをまつんだよ。」

とてもびっくりしてから、きみはじぶんをわらったのかな。こういったよね。

「てっきりまだ、ぼくんちだとおもってた！」

なるほど。ごぞんじのとおり、アメリカでまひるのときは、フランスではタぐれ。だからあつというまにフランスへいけたら、タぐれが見られることになる。でもあいにく、フランスはめちやくちやとおい。だけど、きみの星では、てくてくとイスをもってあるけば、それでいい。そうやってきみは、いつでも見たいときに、くれゆくお日さまを見ていたんだ。

「1日に、44回もタぐれを見たことがあるよ！」

といったすこしあとに、きみはこうつけくわえた。

「そうなんだ……ひとはすつごくせつなくなると、タぐれがこいしくなるんだ……」

「その44回ながめた日は、じゃあすつごくせつなかったの？」
「ただこの王子くんは、へんじをなさらなかった。」

7

5日め、またヒツジのおかげで、この王子くんにつわるなぞが、ひとつあきらかになった。その子は、なんのまえお

きもなく、いきなりきてきたんだ。ずっとひとりで、うーんとやんでいたことが、とけたみたいに。

「ヒツジがちいさな木を食べるんなら、花も食べるのかな？」

「ヒツジは目に入ったものみんな食べるよ。」

「花にトゲがあっても？」

「ああ。花にトゲがあっても。」

「じゃあ、トゲはなんのためにあるの？」

わからなかった。そのときぼくは、エンジンのかたくしまったネジを外そうと、もう手いっぱいだった。しかも気がでなかった。どうも、てひどくやられたらしいということがわかってきたし、さいあく、のみ水がなくなることもあるって、ほんとにおもえてきたからだ。

「トゲはなんのためにあるの？」

この王子くん、しつもんをいちどはじめたら、ぜったいおやめにならない。ぼくは、ネジでいらいらしていたから、いかげんにへんじをした。

「トゲなんて、なんのやくにも立たないよ、たんに花がいじわるしたいんだろ！」

「えっ！」

すると、だんまりしてから、その子はうらめしそうにつつかかってきた。

「ウソだ！ 花はかよわくて、むじゃきなんだ！ どうにかして、ほっとしたいだけなんだ！ トゲがあるから、あぶないんだぞって、おもいたいだけなんだ……」

ぼくは、なにもいわなかった。かたわらで、こうかんがえ

ていた。「このネジがてこでもうごかないのなら、いっそのかなづちでふつとばしてやる。」でも、この王子くんは、またぼくのかんがえをじやまなさった。

「きみは、ほんとにきみは花が……」

「やめろ！ やめてくれ！ 知るもんか！ いいかげんにいっただけだ。ぼくには、ちゃんとやらなきゃいけないことがあるんだよ！」

その子は、ぼくをぽかんと見た。

「ちゃんとやらなきゃ!？」

その子はぼくを見つめた。エンジンに手をかけ、指はふるいグリスで黒くよごれて、ぶかっこうなおきものの上にかがんでいる、そんなぼくのことを。

「おとなのひとみたいな、しゃべりかた！」

ぼくはちよつとはずかしくなった。でも、ようしやなくことばがつづく。

「きみはとりちがえてる……みんないっしょくたにしてる！」

その子は、ほんきでおこっていた。こがね色のかみの毛が、風になびいていた。

「まっ赤なおじさんのいる星があっただけど、そのひとは花のおいもかがないし、星もながめない。ひとをすきになつたこともなくて、たし算のほかはなんにもしたことがないんだ。1にちじゅう、きみみたいに、くりかえすんだ。『わたしは、ちゃんとしたにんげんだ！ ちゃんとしたにんげんなんだ！』それで、はなをたかくする。でもそんなの、にんげんじゃない、そんなの、キノコだ！」

「な、なに？」

「キノコ！」

この王子くん、すっかりごりつぶくだ。

「100まん年まえから、花はトゲをもってる。100まん年まえから、ヒツジはそんな花でも食べてしまう。だったらどうして、それをちゃんとわかろうとしちゃいけないわけ？ なんて、ものすごくがんばってまで、そのなんのやくにも立たないトゲを、じぶんのものにしたのかって。ヒツジと花のけんかは、だいじじゃないの？ ふとった赤いおじさんのたし算のほうがちゃんとしてて、だいじだっていうの？ たったひとつしかない花、ぼくの星のほかにはどこにもない、ぼくだけの花が、ぼくにはあって、それに、ちいさなヒツジが1ぴきいるだけで、花を食べつくしちゃうこともあるって、しかも、じぶんのしてることもわからずに、あさ、ふつとやつちやうことがあるってわかってたとしても、それでもそれが、だいじじゃないっていうの？」

その子はまっ赤になって、しゃべりつづける。

「だれかが、200まんの星のなかにもふたつとない、どれかいちりんの花をすきになったんなら、そのひとはきっと、星空をながめるだけでしあわせになれる。『あのどこかに、ぼくの花がある……』っておもえるから。でも、もしこのヒツジが、あの花を食べたら、そのひとにとっては、まるで、星ぜんぶが、いきなりなくなつたみたいなんだ！ だから、それはだいじじゃないっていうの、ねえ！」

その子は、もうなにもいえなかった。いきなり、わあっと

なきだした。夜がおちて、ぼくはどうぐを手ばなした。なん



だか、どうでもよくなつた。エンジンのことも、ネジのことも、のどのかわきも、死ぬこと

さえも。ひとつの星、ひとつのわくせい、ぼくのいばしょ——このちきゅうの上に、ひとりの気ままな王子くんが、いじらしく立っている。ぼくはその子をだきしめ、ゆつくりとあやした。その子にいった。「きみのすきな花は、なにもあぶなくなんかない……ヒツジにくちわをかいてあげる、きみのヒツジに……花をまもるものもかいてあげる……あと……」どういっていいのか、ぼくにはよくわからなかった。じぶんは、なんてぶきょうなんだろうとおもった。どうやったら、この子と心がかようのか、ぼくにはわからない……すごくふしぎなところだ、なみだのくについて。

8

ほどなくして、その花のことがどんどんわかっていった。それまでも、王子くんの星には、とてもつつましい花があった。花びらがひとまわりするだけの、ちっともばしょをとらない花だ。あさ、気がつくとも草のなかから生えていて、夜に

はなくなっている。でも、あの子のいった花はそれじゃなくて、ある日、どこからかタネがはこばれてきて、めを出したんだ。王子くんはまちかで、そのちいさなめを見つめた。いままで見てきた花のめとは、ぜんぜんちがっていた。またべつのバオバブかもしれないかった。でも、くきはすぐのびるのをやめて、花になるじゅんぴをはじめた。王子くんは、大きなつぼみがつくのを目のあたりにして、花がひらくときはどんなにすごいんだろうと、わくわくした。けれど、その花はみどり色のへやに入ったまま、なかなかおめかしをやめなかった。どんな色がいいか、じつくりとえらび、ちまちまとふくをきて、花びらをひとつひとつとのえていく。ひなげしみたいに、しわくちやのまま出たくなかった。きらきらとかがやくくらい、きれいになるまで、花をひらきたくなかった。そうなんだ、その花はとってもおしゃれさんなんだ！ だから、かくれたまま、なん日もなん日も、みじたくをつづけた。ようやく、あるあさ、ちようどお日さまがのぼるころ、ぱつと花がひらいた。

あまりに気をくばりすぎたからか、その花はあくびをした。

「ふわあ。目がさめたばかりなの……ごめんなさいね……まだ、かみがくしゃくしゃ……」

そのとき、王子くんの口からおもわずことばがついてでた。

「き、きれいだ！」

「そうね。」と花はなにげなく



いった。「お日さまといっしょにさいいたもの……」

この花、あまりつつましくもないけど、心がゆさぶられる……と王子くんはおもった。

そこへすぐ、花のことは。「あさのおしよくじのじかんじやなくて。このままあたしはほうっておかれるの？」

王子くんは、もうしわけなくなつて、つめたい水のはいたじようろをとつてきて、花に水をやった。



こんなちようしで、ちよつとうたぐりぶかく、みえつぱりだったから、その花はすぐに、その子をこまらせるようになった。たとえばある日、花はこの王子くんに、よつつのトゲを見せて、こういった。

「ツメをたてたトラが来たつて、へいき。」

「トラなんて、ぼくの星にはいないよ。」と王子くんはいいかえした。「それに、

トラは草なんて食べない。」

「あたし、草じゃないんだけど。」と花はなにげなくいった。

「ごめんなさい……」

「トラなんてこわくないの、ただ、風にあたるのは大っきらい。ついたてでもないのかしら？」

『風にあたるのがきらいつて……やれやれ、こまった花だ。』

と王子くんはおもった。『この花、とつてもきむずかしいなあ……』

「夜には、ガラスのおおいをかけてちようだい。あなたのおうち、すつごくさむい。いごこちわるい。あたしのもといったところは……」

と、ここで花は話をやめた。

花はタネのかたちでやってきた。

ほかのところなんて、わかるわけなかった。ついむじやきにウソをいってしまいそうになつたので、はずかしくなつたけど、花はえへんえへとせきをして、王子くんのせいしようとした。



「ついたては……？」

「とりにいこうとしたら、きみがしゃべつたんじゃないか！」

また花は、わざとらしくえへんをやつた。その子におしつけるのは、うしろめたかつたけど。

これだから、王子くんは、まっすぐ花をあいつていたけど、すぐしんじられなくなつた。たいしたことのないことばも、ちゃんとうけとめたから、すごくつらくなつていった。



「きいちゃいけなかった。」って、あるとき、その子はぼくにいった。「花はきくものじゃなくて、ながめて、においをかぐものだったんだ。ぼくの花は、ぼくの星を、いいにおいにした。でも、それをたのしめばいいって、わかんなかった。ツメのはなしにしても、ひどくいらしたけど、気もちをわかってあげなくちゃいけなかったんだ。」

まだまだはなしはつづいた。

「そのときは、わかんなかった！　ことばよりも、してくれたことを、見なくちゃいけなかった。あの子は、いいにおいをさせて、ぼくをはれやかにしてくれた。ぼくはぜったいに、にげちゃいけなかった！　へたなけいさんのうらにも、やさしさがあつたのに。あの花は、あまのじゃくなだけなんだ！　でもぼくはわかすぎたから、あいすることってなんなのか、わかんなかった。」

9

星から出るのに、その子はわたり鳥をつかったんだとおもう。出る日のあさ、じぶんの星のかたづけをした。火のついた火山のススを、ていねいにはらった。そこにはふたつ火のついた火山があつて、あさごはんをあたためるのにちょうどよかった。それと火のきえた火山もひとつあつただけど、その子がいうには「まんがいち！」のために、その火のきえた火山もおなじようにススをはらった。しっかりススをはらえば、火山の火も、どかんとならず、ちろちろとながつづ

きする。どかんととっても、えんとつから火が出たくらいの火なんだけど。もちろん、ぼくらのせかいでは、ぼくらはあんまりちっぽけなので、火山のススはいらないでできない。だから、ぼくらにとって火山ってのはずいぶんやっかいなことをする。



△火のついた火山のススを、ていねいにはらった。▽

それから、この王子くんはちよつとさみしそうに、バオバブのめをひっこぬいた。これがさいご、もうぜったいにかえってこないんだ、って。こういう、まいにちきめてやってたことが、このあさには、ずっとずっといとおしくおもえた。さいごにもういちどだけ、花に水をやつて、ガラスのおおいをかぶせようとしたとき、その子はふいになきたくなってきた。

「さよなら。」って、その子は花にいった。でも花はなにもかえさなかった。

「さよなら。」って、もういちどいった。

花はえへんとやったけど、びょうきのせいではなかった。

「あたし、バカね。」と、なんとか花がいった。「ゆるしてね。おしあわせに。」

つかかってこなかったで、その子はびっくりした。ガラスのおおいをもったまま、おろおろと、そのばに立ちつきました。どうしておだやかでやさしいのか、わからなかった。

「ううん、すきな。」と花はいった。「きみがそのことわかんないのは、あたしのせい。どうでもいいか。でも、きみもあたしとおなじで、バカ。おしあわせに。……おおいはそのままにしていって。もう、それだけでいい。」

「でも風が……」

「そんなにひどいびょうきじゃないの……夜、ひんやりした空気にあたれば、よくなるとおもう。あたし、花だから。」

「でも虫は……」

「毛虫の1ぴきや2ひき、がまんしなくちゃ。チョウチョとなかよくなるんだから。すぐきれいなんだってね。そうでもしないと、ここにはだれも来ないし。とおくだしね、きみは。大きな虫でもこわくない。あたしには、ツメがあるから。」
花は、むじゃきによつつのトゲを見せた。それからこういつた。

「そんなぐずぐずしないで、いらいらしちゃう。行くってきめたんなら、ほら！」

なぜなら、花はじぶんのなきがおを見られなくなかったんだ。花ってよわみを見せたくないものだから……。

10

その子は、しょうわくせい325、326、327、328、329や330のあたりまでやってきた。知らないこと、やるべきことを見つけない、とりあえずよってみることにした。さいしょのところは、王さまのすまいだった。王さまは、まっ赤なおりものとアーミンの白い毛がわをまとして、あっさりながらもでんとしたイスにこしかけていた。

「なんと！ けらいだ。」と、王子くんを見るなり王さまは大ごえをあげた。

王子くんはふしぎにおもった。



「どうして、ぼくのことをそうおもうんだろう、はじめてあったのに！」

王さまにかかれば、せかいはとてもあつさりしたものになる。だれもかれもみ

んな、けらい。その子は知らなかったんだ。

「ちこうよれ、よう見たい。」王さまは、やっとだれかに王さまらしくできると、うれしくてたまらなかった。

王子くんは、どこかにすわろうと、まわりを見た。でも、星は大きな毛がわのすそで、どこもいっぱいだった。その子はしかたなく立ちっぱなし、しかもへとへとだったから、あくびが出た。

「王のまえであくびとは、さほうがなっとらん。」と王さまはいった。「だめであるぞ。」

「がまんなんてできないよ。」と王子くんはめいわくそうにへんじをした。「長たびで、ねてないんだ。」

「ならば、あくびをせよ。ひとのあくびを見るのも、ずいぶんごぶさたであるな、あくびとはこれはそえられる。さあ！

またあくびせよ、いうことをきけ。」

「そんなせまられても……むりだよ……」と王子くんは、かおをまっ赤にした。

「むむむ！ では……こうだ、あるときはあくびをせよ、またあるときは……」

王さまはちよつとつまつて、ごきげんななめ。

なぜなら王さまは、なんでもじぶんのおもいどおりにしたくて、そこからはずれるものは、ゆるせなかった。いわゆるへぜったいの王さまVつてやつ。でも根はやさしかったので、ものわかりのいいことしか、いいつけなかった。

王さまにはこんな口ぐせがある。「いいつけるにしても、しょうぐんに海鳥になれといって、しょうぐんがいうことをきかなかつたら、それはしょうぐんのせいではなく、こちらがわるい。」

「すわっていい？」と、王子くんは気まずそうにいった。

「すわるであるぞ。」王さまは毛がわのすそをおごそかにひいて、いいつけた。

でも、王子くんにはよくわからないことがあった。この星はごくごくちーっちゃい。王さまはいったい、なにをおさめてるんだろうか。

「へいか……すいませんが、しつもんが……」

「しつもんをせよ。」と王さまはあわてていった。

「へいかは、なにをおさめてるんですか？」

「すべてである。」と王さまはあたりまえのようにこたえた。

「すべて？」

王さまはそつとゆびを出して、じぶんの星と、ほかのわくせいとか星とか、みんなをさした。

「それが、すべて？」と王子くんはいった。

「それがすべてである……」と王さまはこたえた。

なぜならへぜったいの王さまVであるだけでなく、へうちゅうの王さまVでもあつたからだ。

「なら、星はみんな、いうとおりになるの？」

「むろん。」と王さまはいった。「たちまち、いうとおりになる。それをやぶるものは、ゆるさん。」

あまりにすごい力なので、王子くんはびっくりした。じぶんにもしそれだけの力があれば、44回といわず、72回、いや100回でも、いやいや200回でも、タぐれがたった1日のあいだに見られるんじゃないか、しかもイスもうごかさずに！ そう、かんがえたとき、ちよつとせつなくなつた。そういうえば、じぶんのちいさな星をすててきたんだって。だか

ら、おもいきって王さまにおねがいしてみました。

「タぐれが見たいんです……どうかおねがいます……タぐれろって、いってください……」

「もし、しょうぐんに花から花へチヨウチヨミたいにとべ、であるとか、かなしい話を書け、であるとか、海鳥になれ、であるとかいいつけて、しょうぐんが、いわれたことをできなかったでしょう。なら、そいつか、この王か、どちらがまちがってると、そちはおもう？」

「王さまのほうです。」と王子くんはきつぱりいった。

「そのとおり。それぞれには、それぞれのできることをまかせねばならぬ。ものごとがわかって、はじめて力がある。もし、こくみんに海へとびこめといいつけようものなら、国がひっくりかえる。そのようにせよ、いつてもいいのは、そもそも、ものごとをわきまえて、いいつけるからである。」

「じゃあ、ぼくのタぐれは？」と王子くんはせまった。なぜなら王子くん、いちどきいたことは、ぜったいにわすれない。

「そちのタぐれなら、見られるぞ。いいつけよう。だが、まとう。うまくおさめるためにも、いいころあいになるまでは。」

「それはいつ？」と王子くんはたずねる。

「むむむ！」と王さまはいって、ぶあついへこよみVをしらべた。「むむむ！　そうだな……だい……たい……ごご7じぶぶんくらいである！　さすれば、いうとおりになるのがわかるだろう。」

王子くんはあくびをした。タぐれにあえなくて、ざんねんだった。それに、ちょっともううんざりだった。

「ここですることは、もうないから。」と王子くんは王さまにいった。「そろそろ行くよ！」

「行っってはならん。」と王さまはいった。けらいができて、それだけうれしかったんだ。「行っってはならん、そちを、だいじんにしてやるぞ！」

「それで、なにをするの？」

「む……ひとをさばくであるぞ！」

「でも、さばくにしても、ひとがいないよ！」

「それはわからん。まだこの王国をぐるりとまわってみたことがない。年をとったし、大きな馬車ばしゃをおくばしよもない。あるいてまわるのは、くたびれるんでな。」

「ふうん！　でもぼくはもう見たよ。」と、王子くんはかがんで、もういちど、ちらつと星のむこうがわを見た。「あっちには、ひとつこひとりいない……」

「なら、じぶんをさばくである。」と王さまはこたえた。「もつとむずかしいぞ。じぶんをさばくほうが、ひとをさばくよりも、はるかにむずかしい。うまくじぶんをさばくことができたなら、それは、しょうしんしょうめい、けんじゃのあかしだ。」

すると王子くんはいった。「ぼく、どこにいたって、じぶんをさばけます。ここにすむひつようはありません。」

「むむむ！　たしか、この星のどこかに、よぼよぼのネズミが1びきおる。夜、もの音がするからな。そのよぼよぼのネズミをさばけばよい。ときどき、死けいにするんである。そうすれば、そのいのちは、そちのさばきしだいである。だが、

いつもゆるしてやることだ、だいにせねば。1ぴきしかお
らののだ。」

また王子くんはへんじをする。「ぼく、死けいにするのき
らいだし、もうさっさと行きたいんです。」

「ならん。」と王さまはいう。

もう、王子くんはいつでも行けたんだけど、年よりの王さ
まをしょんぼりさせたくなかった。

「もし、へいかが、いうとおりになるのをおのぞみなら、も
のわかりのいいことを、いいつけられるはずです。いいつけ
る、ほら、1^{ぷん}いいないにしゅっぱつせよ、とか。ぼくには、
もう、いいころあいなんだとおもいます……」

王さまはなにもいわなかった。王子くんはとりあえず、ど
うしようかとおもったけど、ためいきをついて、ついに星を
あとにした……

「そちを、ほかの星へつかわせるぞ！」そのとき、王さまは
あわてて、こういった。

まったくもってえらそうないかただった。

おとなのひとつで、そうとうかわってるな、と王子くんは
心のなかでおもいつつ、たびはつづく。

11

ふたつめの星は、みえっぱりのすまいだった。

「ふふん！ ファンのおでましか！」王子くんが見えるなり、
みえっぱりはとおくから大ごえをあげた。

というのも、みえっぱりにかかれば、だれもかれもみんな
ファンなんだ。

「こんにちは。」と王子くんはいった。「へんなぼうしだね。」



いないわけだが。」

「うん？」王子くんは、なんのことかわからなかった。

「りょう手で、ぱちぱちとやってみな。」と、みえっぱりは
その子にすすめた。

王子くんは、りょう手でぱちぱちとやった。みえっぱりは、
ぼうしをちよつともち上げて、そつとあいさつをした。

「王さまのところよりまたのしいな。」と王子くんは心のな
かでおもった。だからもういちど、りょう手でぱちぱちとや
った。みえっぱりも、ぼうしをちよつともち上げて、もうい
ちどあいさつをした。

5ふんつづけてみたけど、おなじことばかりなので、王子
くんはこのあそびにもあきてしまった。

「じゃあ、そのぼうしを下ろすには、どうしたらいいの？」
と、その子はきいた。

「あいさつでき
る。」と、みえっ
ぱりはいう。「は
くしゅされたら、
これであいさつ
する。あいにく、
ここをとおるす
ぎるひとなんて

でも、みえつぱりはきいてなかった。みえつぱりは、ほめことばにしか、ぜったい耳をかさない。

「おまえは、おれさまを心のそこから、たたえているか？」と、その男は王子くんにきいた。

「たたえるって、どういうこと？」

「たたえるっていうのは、このおれさまが、この星でいちばんかっこよくて、いちばんおしゃれで、いちばん金もちで、いちばんかしこいんだって、みとめることだ。」

「でも、星にはきみしかないよ！」

「おねがいだ、とにかくおれさまをたたえてくれ！」

「たたえるよ。」といって、王子くんは、かたをちよつとあげた。「でも、きみ、そんなことのどこがだいじなの？」

そして王子くんは、そこをあとにした。

おとなのひとつて、やっぱりそうとうおかしいよ、とだけ、その子は心のなかで思いつつ、たびはつづく。

12



つぎの星は、のんだくれのすまいだった。

ほんのちよつとよつただけなのに、王子くんは、ずいぶん気もちがおちこんでしまった。「ここであんなにしてる

の？」王子くんは、のんだくれにいった。その子が見ると、その男は、からのビンひとそろい、なかみのはいったビンひとそろいをまえにして、だんまりすわっていた。

「のんでんだ。」と、のんだくれは、しょんぼりとこたえた。

「なんで、のむの？」と王子くんはたずねた。

「わすれたいんだ。」と、のんだくれはこたえた。

「なにをわすれたいの？」と、王子くんは気のどくになつてきて、さらにきいた。

「はずかしいのをわすれたい。」と、のんだくれはうつむきながら、うちあけた。

「なにがはずかしいの？」と、王子くんはたすけになりたくて、たずねてみた。

「のむのがはずかしい！」のんだくれは、そういったきり、とうとうだんまりをきめこんだ。

どうしていいかわからず、王子くんは、そこをあとにした。おとなのひとつて、やっぱりめっちゃおかしい、とその子は心のなかで思いつつ、たびはつづく。

13

よつつめの星は、しごとにんげんのものだった。このひとは、とってもいそがしいので、王子くんが来たときも、かおを上げなかった。

「こんにちは。」と、その子はいった。「たばこの火、きえてるよ。」

「 $3 + 2 \parallel 5$ 。 $5 + 7 \parallel 12$ 。 $12 + 3 \parallel 15$ 。 こんにちは。

$15 + 7 \parallel 22$ 。 $22 + 6 \parallel 28$ 。

火をつけなおすひまなんてない。 $26 + 5 \parallel 31$ 。 ふう。 とうけいが、5おく

162 まん 2731 。」

「なに、その5おくって。」

「ん？ まだいたのか。」

5おく……もうわからん……やらなきやいけないことがたくさんあるんだ！ ちゃんとしてるんだ！ ちゃんとしてるんだ！

だ、わたしは。 むだ口たたいてるひまはない！ $2 + 5 \parallel 7$

……」

「なんなの、その5おく100まんっていうのは。」 また王子くんはいった。 なにがあっても、いちどしつもんをはじめたら、ぜったいにやめない。

しごとにんげんは、かおを上げた。

「54年この星にすんでいるが、気がちったのは、3どだけだ。

さいしよは、あれだ、22年まえのこと、コガネムシがどこからともなく、とびこんできたせいだ。 ぶんぶんとうるさくしたから、たし算を4回まちがえた。 2どめは、あれだ、「11年まえ、リウマチのほっさがおきたせいだ。 うんどうぶそくで、あるくひまもない。 ちゃんとしてるんだ、わたしは。 3どめは……まさにいまだ！ さてと、5おく100……」

「……も、なにがあるの？」

しごとにんげんは、ほっといてはもらえないんだと、あきらめた。

「……も、あのちいさいやつがあるんだ。 ときどき空に見えるだろ。」

「ハエ？」

「いいや、そのちいさいのは、ひかる。」

「ミツバチ？」

「いいや。 そのちいさいのは、こがね色で、なまけものをうつとりさせる。 だが、ちゃんとしてるからな、わたしは！ うつとりしてるひまはない。」

「あつ！ 星？」

「そうだ、星だ。」

「じゃあ、5おく100まんの星をどうするの？」

「5おく162まん2731。 ちゃんとしてるんだ、わたしは。 こまかいんだ。」

「それで、星をどうするの？」

「どうするかって？」

「うん。」

「なにも。 じぶんのものにする。」

「星が、きみのもの？」

「そうだ。」

「でも、さっきあった王さまは……」

「王さまは、じぶんのものにしない、へおさめるんだ。 ぜんぜんちがう。」



「じゃあ、星がじぶんのものだ、なんのためになの？」

「ああ、お金もちになれるね。」

「じゃあ、お金もちだと、なんのためになの？」

「またべつの星が買える、あたらしいのが見つかったら。」

王子くんは心のなかでおもった。『このひと、ちよつとへりくつこねてる。さっきのよっぱらいといっしょだ。』

でもとりあえず、しつもんをつづけた。

「どうやったら、星がじぶんのものになるの？」

「そいつは、だれのものだ？」と、しごとにんげんは、ぶつさらぼうにへんじをした。

「わかんない。だれのものでもない。」

「じゃあ、わたしのものだ。さいしょにおもいついたんだから。」

「それでいいの？」

「もちろん。たとえば、きみが、だれのものでもないダイヤを見つけたら、それはきみのものになる。だれのものでもない島を見つけたら、それはきみのもの。さいしょになにかをおもいついたら、へとつきよゝがとれる。きみのものだ。だから、わたしは星をじぶんのものにする。なぜなら、わたしよりさきに、だれひとりも、そんなことをおもいつかなかったからだ。」

「うん、なるほど。」と王子くんはいった。「で、それをどうするの？」

「とりあつかう。かぞえて、かぞえなおす。」と、しごとにんげんはいった。「むずかしいぞ。だが、わたしは、ちゃん

としたにんげんなんだ！」

王子くんは、まだなっとくできなかった。

「ぼくは、スカーフいちまい、ぼくのものだったら、首のまわりにまきつけて、おでかけする。ぼくは、花が1りん、ぼくのものだったら、花をつんでもっていく。でも、きみ、星はつめないよね！」

「そうだ。だが、ぎんこうにあずけられる。」

「それってどういうこと？」

「じぶんの星のかずを、ちいさな紙きれにかきとめるってことだ。そうしたら、その紙を、ひきだしにしまつて、カギをかける。」

「それだけ？」

「それでいいんだ！」

王子くんはおもった。『おもしろいし、それなりにかっこいい。でも、ぜんぜんちゃんとしてない！』

王子くんは、ちゃんとしたことについて、おとなのひとと、ちがったかんがえをもっていたんだ。

「ぼく。」と、その子はことばをつづける。「花が1りん、ぼくのもので、まいにち水をやります。火山がみつ、ぼくのもので、まいしゅう、ススはらいをします。それに、火がきえるのも、ススはらいします。まんがいちがあるから。火山のためにも、花のためにもなってます、ぼくのものにしてるってことが。でも、きみは星のためにはなってます……」しごとにんげんは、口もとをひらいたけど、かえすことばが、みつからなかった。王子くんは、そこをあとにした。

おとなのひとって、やっぱりただのへんてこりんだ、とだけ、その子は心のなかでおもいつつ、たびはつづく。

14

「それこそ、ひどい仕事だよ。」



いつつめの星は、すごくふしぎなところだった。ほかのどれよりも、ちいさかった。ほんのぎりぎり、あかりと、あかりつけの入るばしょがあるだけだった。王子くんは、どうやってもわからなかった。空のこんなばしょで、星に家もないし、人もいないのに、あかりとあかりつけがいて、なんのためになんだろうか。それでも、その子は、心のなかでこうおもった。

『このひとは、ばかばかしいかもしれない。でも、王さま、みえっぱり、しごとになげんやのんだくれなんかよりは、ばかばかしくない。そうだとすると、このひとのやっтерることは、いみがある。あかりをつけるってことは、たとえるな

ら、星とか花とかが、ひとつあたらしくうまれるってこと。だから、あかりをけすのは、星とか花をおやすみさせるってこと。とってもすてきなおつとめ。すてきだから、ほんとうに、だれかのためになる。』

その子は星にちかづく、あかりつけにうやうやしくあいさつをした。

「こんにちは。どうして、いま、あかりをけしたの？」

「しなさいっていわれてるから。」と、あかりつけはこたえた。「こんにちは。」

「しなさいって、なにを？」

「このあかりをけさせて。こんばんは。」

と、そのひとは、またつけた。

「えっ、どうして、いま、またつけたの？」

「しなさいっていわれてるから。」と、あかりつけはこたえた。

「よくわかんない。」と王子くんはいった。

「わかんなくていいよ。」と、あかりつけはいった。「しなさいは、しなさいだ。こんにちは。」

と、あかりをけした。

それから、おでこを赤いチェックのハンカチでふいた。

「それこそ、ひどいしごとだよ。むかしは、ものがわかってた。あさけして、夜つける。ひるのあまつたじかんをやすんで、夜のあまつたじかんは、ねる……」

「じゃあ、そのころとは、べつのことをしなさいって？」

「おなじことをしなさいって。」と、あかりつけはいった。「そ

れがほんと、ひどい話なんだ！ この星は年々、まわるのがどんどん早くなるのに、おなじことをしなさいって！」

「つまり？」

「つまり、いまでは、1ぷんでひとまわりするから、ぼくにはやすむひまが、すこしもありやしない。1ぷんのあいだに、つけたりけしたり！」

「へんなの！ きみんちじゃ、1日が1ぷんだなんて！」

「なにがへんだよ。」と、あかりつけがいった。「もう、ぼくらは1か月もいっしょにしゃべってるんだ。」

「1か月？」

「そう。30ぷん、30日！ こんばんは。」

と、またあかりをつけた。

王子くんは、そのひとのことをじっと見た。しなさいっていわれたことを、こんなにもまじめにやる、このあかりつけのことが、すきになった。その子は、タぐれを見たいとき、じぶんからイスをうごかしていたことを、おもいだした。その子は、この友だちをたすけたかった。

「ねえ……やすみたいときに、やすめるコツ、知ってるよ……」

「いつだってやすみたいよ。」と、あかりつけはいった。

ひとつっていうのは、まじめにやっても、なまけたいものなんだ。

王子くんは、ことばをつづけた。

「きみの星、ちいさいから、大またなら3ぷでひとまわりできるよね。ずっと日なたにいられるように、ゆっくりあるく

だけでいいんだよ。やすみたくなったら、きみはあるく……すきなぶんだけ、おひるがずっとつづく。」

「そんなの、たいしてかわらないよ。」と、あかりつけはいった。「ぼくがずっとねがってるのは、ねむることなんだ。」

「こまったね。」と王子くんがいった。

「こまったね。」と、あかりつけもいった。「こんにちは。」と、あかりをけした。

王子くんは、ずっととおくへたびをつづけながら、こんなふうにおもった。『あのひと、ほかのみんなから、ばかにされるだろうな。王さま、みえっぱり、のんだくれ、しごにんげんから。でも、ぼくからしてみれば、たったひとり、あのひとだけは、へんだとおもわなかった。それっていうのも、もしかすると、あのひとが、じぶんじゃないことのために、あくせくしてたからかも。』

その子は、ざんねんそうにためいきをついて、さらにかんがえる。

『たったひとり、あのひとだけ、ぼくは友だちになれるとおもった。でも、あのひとの星は、ほんとにちいさすぎて、ふたりも入らない……』

ただ、王子くんとしては、そうとおもいたくなかったんだけど、じつは、この星のことも、ざんねんにおもっていたんだ。だって、なんといっても、24じかに1440回もタぐれが見られるっていう、めぐまれた星なんだから！

むつつめの星は、なん10ばいもひろい星だった。ぶあつい本をいくつも書いてある、おじいさんのすまいだった。

「おや、たんけん家じゃな。」王子くんが見えるなり、そのひとは大ごえをあげた。

王子くんは、つくえの上にしかけて、ちょっといきをついた。もうそれだけたびをしたんだ！
「どこから来たね？」と、おじいさんはいった。
「なあに、そのぶあつい本？」と王子くんはいった。「ここでもなにしているの？」



「わしは、ちりのはかせじゃ。」と、おじいさんはいった。

「なあに、そのちりのはかせっていうのは？」

「ふむ、海、川、町、山、さばくのあるところをよくしつとる、もの知りのことじゃ。」

「けっこうおもしろそう。」と王子くんはいった。「やっと、ほんもののしごとにあえた！」それからその子は、はかせの星をぐるりと見た。こんなにもでんとした星は、見たことがなかった。

「とってもみごとですね、あなたの星は。大うなばらは、あ

るの？」

「まったくもってわからん。」と、はかせはいった。

「えっ！（王子くんは、がっかりした。）じゃあ、山は？」
「まったくもってわからん。」と、はかせはいった。

「じゃあ、町とか川とか、さばくとかは？」

「それも、まったくもってわからん。」と、はかせはいった。

「でも、ちりのはかせなんですよ！」

「さよう。」と、はかせはいった。「だが、たんけん家ではない。それに、わしの星にはたんけん家がおらん。ちりのはかせはな、町、川、山、海、大うなばらやさばくをかぞえに行くことはない。はかせというのは、えらいひとだもんで、あるきまわったりはせん。じぶんのつくえを、はなれることはない。そのかわり、たんけん家を、むかえるんじや。はかせは、たんけん家にものをたずね、そのみやげ話をききとる。そやつらの話で、そそられるものがあつたら、そこではかせは、そのたんけん家が、しょうじきものかどうかをしらべるんじや。」

「どうして？」

「というのな、たんけん家がウソをつくと、ちりの本はめちゃくちゃになってしまう。のんだくれのたんけん家も、おなじだ。」

「どうして？」と王子くんはいった。

「というのな、よっぱらいは、ものがだぶって見える。そうすると、はかせは、ひとつしかないのに、ふたつ山があるように、書きとめてしまうからの。」

「たんけん家に、ふむきなひと、ぼく知ってるよ。」と王子くんはいった。

「いるじやろな。ところで、そのたんけん家が、しょうじきそうだったら、はかせは、なにが見つかったのか、たしかめることになる。」

「見に行くの？」

「いや。それだと、あまりにめんどうじゃ。だから、はかせは、たんけん家に、それをしんじさせるだけのものを出せ、という。たとえば、大きな山を見つけたっていうんであれば、大きな石ころでももってこにやらん。」

はかせは、ふいにわくわくしだした。

「いやはや、きみはとおくから来たんだな！ たんけん家だ！

さあ、わしに、きみの星のことをしゃべってくれんか。」

そうやって、はかせはノートをひらいて、えんぴつをけずった。はかせというものは、たんけん家の話をまず、えんぴつで書きとめる。それから、たんけん家が、しんじられるだけのものを出してきたら、やっとインクで書きとめるんだ。

「それで？」と、はかせはたずねた。

「えっと、ぼくんち。」と王子くんはいった。「あんまりおもしろくないし、すぐくちいさいんだ。みつつ火山があつて、ふたつは火がついていて、ひとつはきえてる。でも、まんがいちがあるかもしれない。」

「まんがいちがあるかもしれんな。」と、はかせはいった。

「花もあるよ。」

「わしらは、花については書きとめん。」と、はかせはいっ

た。

「どうしてなの！ いちばんきれいだよ！」

「というのみな、花ははかないんじや。」

「なに、そのへはかないゝって？」

「ちりの本はな、」と、はかせはいう。「すべての本のなかで、いちばんちゃんとしておる。ぜったい古くなったりせんからの。山がうごいたりするなんぞ、めったにない。大うなばらがひあがるなんぞ、めったにない。わしらは、かわらないものを書くんじや。」

「でも、きえた火山が目をさますかも。」と王子くんはわりこんだ。「なあに、そのへはかないゝって？」

「火山がきえてようと、目ざめてようと、わしらにとっては、おなじこと。」と、はかせはいった。「わしらにだいじなのは、山そのものだけじや。うごかんからな。」

「でも、そのへはかないゝってなに？」また王子くんはいった。なにがあつても、いちどしつもんをはじめたら、ぜったいにやめない。

「それは、へすぐにきえるおそれがあるゝということじや。」

「ぼくの花は、すぐにきえるおそれがあるの？」

「むろんじや。」

『ぼくの花は、はかない。』と王子くんはおもった。『それに、まわりからじぶんをまもるのは、よっつのトゲだけ！ それに、ぼくは、ぼくんちに、たったひとつおきざりにしてきたんだ！』

その子は、ふいに、やめておけばよかった、とおもった。

でも、氣をとりなおして、
「これから行くのに、おすすめの星はありませんか？」と、
その子はたずねた。
「ちきゅうという星じゃ。」と、はかせはこたえた。「いいところだときいておる……」
そうして、王子くんは、そこをあとにした。じぶんの花のことを、おもいつつ。

16

そんなわけで、ななつめの星は、ちきゅうだった。

このちきゅうというのは、どこにでもある星なんかじゃない！ かぞえてみると、王さまが（もちろん黒いかおの王さまも入れて）111にん、ちりのはかせが7000にん、しごとになげんが90まんにん、のんだくれが750まんにん、みえっぱりが3おく1100まんにんで、あわせてだいたい20おくのおとなのひとがいる。

ちきゅうの大きさをわかりやすくする、こんな話がある。
電気がつかわれるまでは、むつつの大きくひつくるめて、なんと46まん2511にんもの、おおぜいのあかりつけがいなきやならなかった。

とおくからなめると、たいへん見ものだ。このおおぜいのうごきは、バレエのダンサーみたいに、きちつきちつとしていた。まずはニュージールランドとオーストラリアのあかりつけの出ばんが来る。そこでじぶんのランプをつけると、こ

のひとたちはねむりにつく。するとつぎは中国とシベリアのばんが来て、このうごきにくわって、おわると、うらにひっこむ。それからロシアとインドのあかりつけのばんになる。つぎはアフリカとヨーロッパ。それから南アメリカ、それから北アメリカ。しかも、このひとたちは、じぶんの出るじゅんを、ぜったいまちがえない。

でも、北きよくにひとつだけ、南きよくにもひとつだけ、あかりがあるんだけど、そのふたりのあかりつけは、のんびんだらりとしたまいにちをおくっていた。だって、1年に2回はたらくだけでいいんだから。

17

うまくいおうとして、ちょっとウソをついてしまうつてことがある。あかりつけのことも、ぜんぶありのままってわけじゃないんだ。そのせいで、なにも知らないひとに、ぼくの星のことをへんにおしえてしまったかもしれない。ちきゅうのほんのちよつとしか、にんげんのものじゃない。ちきゅうにすんでる20おくのひとに、まっすぐ立つてもらって、集しゅうかい会かいみたいによりあつまってもらったら、わけもなく、たて30キロよこ30キロのひろばにおさまってしまう。太平洋たいへんようでいちばんちっちゃい島にだって、入ってしまうかずだ。

でも、おとなのひとにこんなことをいっても、やっぱりしんじない。いろんなところが、じぶんたちのものだっておもいたいんだ。じぶんたちはバオバブくらいでっかいものなん



だって、かんがえてる。だから、そのひとたちに、「かぞえてみてよ」って、いってごらん。すうじが大すぎだから、きつとうれしがる。でも、みんなはそんなつまらないことで、じかんをつぶさないように。くだらない。みんな、ぼくをしんじて。

王子くんはちきゅうに
ついたんだけど、そのとき、ひとのすがたがどこにもなくて、びっくりした。それですなのなかで、月の色した輪っかが、もぞもぞうごいた。
「こんばんは。」と王子くんがとりあえずいつてみると、
「こんばんは。」とへびがいった。

「ぼく、どの星におっこちたの？」と王子くんがきくと、
「ちきゅうの、アフリカ。」とへびがこたえた。
「えっ、まさか、ちきゅうにはひとがいないの？」
「ここは、さばく。さばくに、ひとはいない。ちきゅうは、ひろい。」とへびはいった。

王子くんは石ころにすわって、目を空のほうへやった。
「星がきらきらしてるのは、みんなが、ふとしたときに、じぶんの星を見つけられるようにするためののかな。ほら、ぼくの星！ まうえにあるやつ……でも、ほんとにとおいな

あ！

「きれいだ。」とへびはいう。「ここへ、なにしに？」
「花とうまくいつてなくて。」と王子くんはいった。
「ふうん。」とへびはいった。

それで、ふたりはだんまり。

「ひとはどこにいるの？」と、しばらくしてから王子くんがきた。「さばくだと、ちょっとひとりぼっちだし。」

「ひとのなかでも、ひとりぼっちだ。」とへびはいった。

王子くんは、へびをじっと見つめた。

「きみて、へんないきものだね。」と、しばらくしてから王子くんが

いった。「ゆびみたいに、ほっそりしてる……」

「きみて、へんないきものだね。」と、しばらくしてから王子くんがいった。「ゆびみたいに、ほっそりしてる……」
「でもおれは、王さまのゆびより、つよい。」とへびはいった。

王子くんはにつこりした。

「きみ、そんなにつよくないよ……手も足もなくて……たびだって、できないよ……」

「おれは船よりも、ずっととおくへ、きみをつれてゆける。」とへびはいった。

へびは王子くんのくるぶしに、ぐるりとまきついた。金の

うでわみたいに。

「おれがついたものは、もといた土にかえる。」と、ことををつづける。「でも、きみはけがれていない。それに、きみは星から来た……」

王子くんは、なにもへんじをしなかった。

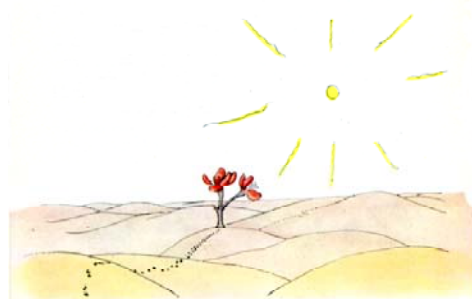
「きみを見てると、かわいそうになる。このかたい岩ででき



18

王子くんは、さばくをわたったけど、たった1りんの花に出くわしたただけだった。花びらがみつつだけの花で、なんのとリエもない花……

「こんにちは。」と王子くんがいうと、



ぶんふべんね。」

「さようなら。」と王子くんがいうと、

「さようなら。」と花がいった。

19

「こんにちは。」と花がいった。

「ひとはどこにいますか？」と、王子くんはていねいにたずねた。

花は、いつだか、ぎょうれつがとおるのを見たことがあった。

「ひと？ いるとおもう。6にんか7にん。なん年かまえに見かけたから。でも、どこであえるか、ぜんぜんわかんない。風まかせだもん。あのひとたち、根っこがないの。それってずい



△ここ、かさかさしてるし、とげとげしてるし、ひりひりする。▽

王子くんは、たかい山にのぼった。それまでその子の知っていた山といえ、たけがひざまでしかない火山がみつただけ。しかも、きえた火山はこしかけにつかっていたくらいだ。だから、その子はこんなふうにかんがえた。『こんなにかい山からなら、ひと目で、この星ぜんたいと、ひとみんなを見とおせるはず……』でも、見えたのは、するどくがった岩山ばかりだった。

「こんにちは。」と、その子がとりあえずいつてみると、

「こんにちは……こんにちは……こんにちは……」と、やまびこがへんじをする。

「なんて名まえ？」と王子くんがいうと、

「なんて名まえ……なんて名まえ……なんて名まえ……」と、やまびこがへんじをする。

「友だちになってよ、ひとりぼっちなんだ。」と、その子がいうと、

「ひとりぼっち……ひとりぼっち……ひとりぼっち……」と、やまびこがへんじをする。

『もう、へんな星!』と、その子はそのときおもった。『ここ、かさかさしてるし、とげとげしてるし、ひりひりする。ひとつ、おもいえがく力がないんじゃないの。だれかのいったことをくりかえす……ぼくんちにある花は、いっつもむこうからしゃべりかけてくるのに……』

さて、王子くんが、さばくを、岩山を、雪の上をこえて、ながながとあゆんでいくと、ようやく1本の道に行きついた。そして道をゆけば、すんなりひとのいるところへたどりつく。

「こんにちは。」と、その子はいった。

そこは、バラの花がさきそろう庭^{にわ}だった。

「こんにちは。」と、バラがいつせいにこたえた。

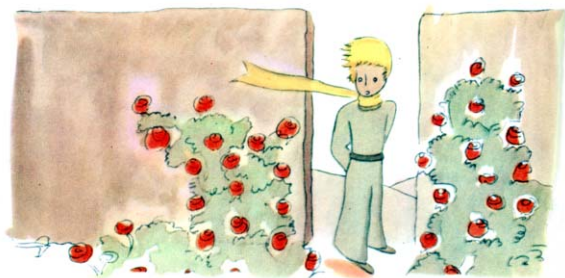
王子くんは、たくさんバラをながめた。みんな、その子に花にそっくりだった。

「きみたち、なんて名まえ？」と、王子くんはぽかんとしながら、きいた。

「わたしたち、バラっていうの。」と、バラがいつせいにこたえた。

「えっ!」って、王子くんはいつて……

そのあと、じぶんがはじめにおもえてきた。その子に花は、うちゅうにじぶんとおなじ花なんてないって、その子にしゃべっていた。それがどうだろう、このひとつの庭だけでも、



にたようなものがぜんぶで、5000ある！

その子はおもった。『あの子、こんな
のを見たら、すねちゃうだろうな……
きつと、とんでもないほど、えへんえ
へんってやって、かれたふりして、バ
カにされないようにするだろうし、そ
うしたら、ぼくは、手あてをするふり
をしなくちゃいけなくなる。だって、
しなけりゃあの子、ぼくへのあてつけ
で、ほんとにじぶんをからしちゃうよ
……』

それからこうもかんがえた。『ひとつ

しかない花があるから、じぶんはぜいたくなんだとおもって
た。でも、ほんとにあったのは、ありきたりのバラ。それと、
ひざたけの火山みっつで、そのうちひとつは、たぶん、ずっ

ときえたまま。これじゃあ、り
っぱでえらいあるじにはなれな
い……』そうして、草むらにつ
つぶして、なみだをながした。

△そうして、草むらにつつぶ
して、なみだをながした。▽



21

キツネが出てきたのは、そのときだった。

「こんにちは。」とキツネがいった。

「こんにちは。」と王子くんはていねいにへんじをして、ふ
りかえたけど、なんにもいなかった。

「ここだよ。」と、こえがきこえる。「リンゴの木の下……」

「きみ、だれ？」と王子くんはいった。「とってもかわいい
ね……」

「おいら、キツネ。」とキツネはこたえた。

「こっちにきて、いっしょにあそぼうよ。」と王子くんがさ
そった。「ぼく、ひどくせつないんだ……」

「いっしょにはあそべない。」とキツネはいった。「おいら、
きみになつけられてないもん。」

「あ！ ごめん。」と王子くんはいった。

でも、じっくりかんがえてみて、こうつけくわえた。

「△なつける▽って、どういうこと？」

「このあたりのひとじゃないね。」とキツネがいった。「なに
かさがしてるの？」

「ひとをさがしてる。」と王子くんはいった。「△なつける▽
って、どういうこと？」

「ひと。」とキツネがいった。「あいつら、てっぽうをもって、
かりをする。いいめいわくだよ！ ニワトリもかっているけど、
それだけがいっつらのとりえなんだ。ニワトリはさがして

る?」

「ううん。」と王子くんはいった。「友だちをさがしてる。ハなつける√って、どういうこと?」

「もうだれもわすれちゃったけど、」とキツネはいう。「ハきずなをつくる√ってことだよ……」

「きずなをつくる?」

「そうなんだ。」とキツネはいう。「おいらにしてみりや、きみはほかのおとこの子10まんにと、なんのかわりもない。きみがいなきやダメだってこともない。きみだって、おいらがいなきやダメだってことも、たぶんない。きみにしてみりや、おいらはほかのキツネ10まんびきと、なんのかわりもないから。でも、きみがおいらをなついたら、おいらたちはおたがい、あいてにいてほしい、っておもうようになる。きみは、おいらにとつて、せかいにひとりだけになる。おいらも、きみにとつて、せかいで1ぴきだけになる……」

「わかつてきた。」と王子くんはいった。「いちりんの花があるんだけど……あの子は、ぼくをなつけたんだとおもう……」

「かもね。」とキツネはいった。「ちきゅうじゃ、どんなことだっておこるから……」

「えっ! ちきゅうの話じゃないよ。」と王子くんはいった。

キツネはとってもふしぎがった。



「ちがう星の話?」

「うん。」

「その星、かりうどはいる?」

「いない。」

「いいねえ! ニワトリは?」

「いない。」

「そううまくはいかないか。」とキツネはためいきをついた。

さて、キツネはもとの話にもどつて、

「おいらのまいにち、いつもおなじことのくりかえし。おいらはニワトリをおいかけ、ひとはおいらをおいかける。ニワトリはどれもみんなおんなじだし、ひとだってだれもみんなおんなじ。だから、おいら、ちょっとうんざりしてる。でも、きみがおいらをなつけるんなら、おいらのまいにちは、ひかりがあふれたみたいになる。おいらは、ある足音を、ほかのどんなやつとも聞きわけられるようになる。ほかの音なら、おいら穴ぐらのなかにかくれるけど、きみの音だったら、はやされたみたいに、穴ぐらからとんでいく。それから、ほら! あのむこうの小むぎばたけ、見える? おいらはパンをたべないから、小むぎってどうでもいいものなんだ。小むぎばたけを見ても、なんにもかんじない。それって、なんかせつない! でも、きみのかみの毛って、こがね色。だから、小むぎばたけは、すっごくいいものにかわるんだ、きみがおいらをなついたら、だけど! 小むぎはこがね色だから、おいらはきみのことを思いだすよ。そうやって、おいらは小むぎにかこまれて、風の音をよく聞くようになる……」

キツネはだんまりして、王子くんをじつと見つめて、「おねがい……おいらをなつておくれ!」といった。

「よろこんで。」と王子くんはへんじをした。「でもあんまりじかんがないんだ。友だちを見つけて、たくさんを知らなきゃならない。」

「自分のなつけたもののしか、わからないよ。」とキツネはいった。「ひとは、ひまがぜんぜんないから、なんにもわからない。ものうりのところで、できあがったものだけをかうんだ。でも、友だちをうるやつなんて、どこにもいないから、ひとには、友だちでもものがちつともいない。友だちがほしいなら、おいらをなつてくれ!」

「なにをすればいいの?」と王子くんはいった。

「気ながにやらないけない。」とキツネはこたえる。「まずは、おいらからちよつとはなれたところにすわる。たとえば、その草むらにね。おいらはきみをよこ目で見て、きみは

なにもしゃべらない。こ
とばは、すれちがいのも
となんだ。でも、1日、
1日、ちよつとずつそば
にすわってもいいように
なる……」

へそうだね、きみがごご
の4じに来るなら、
3じにはもう、おいら、

うきうきしてくる。v

あくる日、王子くんはまたやってきた。

「おんなじじかんに、来たほうがいいよ。」とキツネはいった。「そうだね、きみがごごの4じに来るなら、3じにはもう、おいら、うきうきしてくる。それからじかんがどんどんすすむと、ますますうきうきしてるおいらがいて、4じになるころには、ただもう、そろそろどきどき。そうやって、おいらは、しあわせをかみしめるんだ! でも、でたらめなじかんにくるなら、いつ心をおめかししていいんだか、わからない……きまりごとがいるんだよ。」

「きまりごとって、なに?」と王子くんはいった。

「これもだれもわすれちゃったけど、」とキツネはいう。「1日をほかの1日と、1じかンをほかの1じかんと、べつのもにしてしまうものことなんだ。たとえば、おいらをねらうかりうどにも、きまりごとがある。あいつら、木ようは村のむすめとダンスをするんだ。だから、木ようはすつごくいい日! おいらはブドウばたけまでぶらぶらあるいていく。もし、かりうどがじかンをきめずにダンスしたら、どの日もみんなおんなじようになつて、おいらの心やすまる日がすこしもなくなる。」

こんなふうにして、王子くんはキツネをなつけた。そして、そろそろ行かなきゃならなくなつた。

「はあ。」とキツネはいった。「……なみだがでちゃう。」



「きみのせいだよ。」と王子くんはいった。「ぼくは、つらいのはぜったいいやなんだ。でも、きみは、ぼくになつけてほしかったんでしょ……」

「そうだよ。」とキツネはいった。

「でも、いまにもなきそうじゃないか！」と王子くんはいった。

「そうだよ。」とキツネはいった。

「じゃあ、きみにはなんのいいこともないじゃない！」

「いいことはあったよ。」とキツネはいった。「小むぎの色のおかげで。」

それからこうつづけた。

「バラの庭に行ってみなよ。きみの花が、せかいにひとつだけってことがわかるはず。おいらにさよならをいいにもどってきたら、ひみつをひとつおしえてあげる。」

王子くんは、またバラの庭に行った。

「きみたちは、ぼくのバラとはちっともにていない。きみたちは、まだなんでもない。」と、その子はたくさんのバラにいった。「だれもきみたちをなつけてないし、きみたちもだれひとりなつけていない。きみたちは、であったときのぼくのキツネとおんなじ。あの子は、ほかのキツネのまんびきと、なんのかわりもなかった。でも、ぼくがあの子を友だちにしたら、もういまでは、あの子はせかいにただ1ぴきだけ。」

するとたくさんのバラは、ばつがわるそうにした。

「きみたちはきれいだけど、からっぽだ。」と、その子はつ

づける。「きみたちのために死ぬことなんてできない。もちろん、ぼくの花だって、ふつうにとおりすがったひとから見れば、きみたちとおんなじなんだとおもう。でも、あの子はいるだけで、きみたちぜんぶよりも、だいじなんだ。だって、ぼくが水をやったのは、あの子。だって、ぼくがガラスのおおいに入れたのは、あの子。だって、ぼくがついたてでもったのは、あの子。だって、ぼくが毛虫をつぶしてやったのも(2、3びき、チョウチョにするためにのこしたけど)、あの子。だって、ぼくが、もんとか、じまんとか、たまにだんまりだってきいてやったのは、あの子なんだ。だって、あの子はぼくのバラなんだもん。」

それから、その子はキツネのところへもどってきた。

「さようなら。」と、その子がいうと……

「さようなら。」とキツネがいった。「おいらのひみつだけど、すつごくかんたんなことなんだ。心でなくちゃ、よく見えない。もののなかみは、目では見えない、ってこと。」

「もののなかみは、目では見えない。」と、王子くんはもういちどくりかえした。わすれないように。

「バラのためになくしたじかんが、きみのバラをそんなにもだいじなものにしたんだ。」

「バラのためになくしたじかん……」と、王子くんはいった。わすれないように。

「ひとは、ほんとのことを、わすれてしまった。」とキツネはいった。「でも、きみはわすれちゃいけない。きみは、じ

ぶんのなつけたものに、いつでもなにかをかえさなくちゃいけない。きみは、きみのバラに、なにかをかえすんだ……」
「ぼくは、ぼくのバラになにかをかえす……」と、王子くんはもういちどくりかえした。わすれないように。

22

「こんにちは。」と王子くんがいうと、

「こんにちは。」とポイントがかりがいった。

「ここでのなにしてるの？」と王子くんがいうと、

「おきやくを1000にんずつわけてるんだ。」とポイントがかりがいった。「きかんしゃにおきやくがのつてて、そいつをおまえは右だ、おまえは左だつて、やってくんだよ。」

すると、きかんしゃが、ぴかつ、びゅん、かみなりみたい

に、ごろごろごろ。ポイントがかりのいるたてものがゆれた。
「ずいぶんいそいでるね。」と王子くんはいった。「なにかさがしてるの？」

「それは、うごかしてるやつだつて、わからんよ。」とポイントがかりはいった。

すると、こんどはぎやくむきに、ぴかつ、びゅん、ごろごろごろ。

「もうもどってきたの？」と王子くんがきくと……

「おんなじのじゃないよ。」とポイントがかりがいった。「いれかえだ。」

「じぶんのいるところが気にいらないの？」

「ひとは、じぶんのいるところが、ぜったい気にいらないんだ。」とポイントがかりがいった。

すると、またまた、ぴかつ、びゅん、ごろごろごろ。

「さっきのおきやくをおいかけてるの？」と王子くんはきいた。

「だれもおっかけてなんかないよ。」とポイントがかりはいった。「なかでねてるか、あくびをしてる。子どもたちだけが、まどガラスに鼻をおしつけてる。」

「子どもだけが、じぶんのさがしものがわかつてるんだね。」と王子くんはいった。「パッチワークのになぎようにじかんをなくして、それがだいじなものになって、だからそれを取りあげたら、ないちゃうんだ……」

「うらやましいよ。」とポイントがかりはいった。

23

「こんにちは。」と、王子くんがいうと、
「こんにちは。」と、ものうりがいった。

ものうりはクスリをうっていた。そのクスリは、のどのからからおさえるようにできていて、1しゅうかんにひとつぶで、もう、のみたいっておもわなくなるんだ。

「どうして、そんなのをうるの？」と王子くんはいった。



「むだなじかんをはぶけるからだ。」と、ものうりはいった。
「はかせがかぞえたんだけど、1しゅうかんに53ぶんもむだ
がはぶける。」

「その53ぶんをどうするの？」

「したいことをするんだ……」

王子くんはかんがえる。『ぼく、53ぶんもじゆうになるん
なら、ゆっくりゆーっくり、水くみ場にあるいていくんだけ
ど……』

24

おかしくなつて、さばくに下りてから、8日め。ぼくは、
ものうりの話をききながら、ほんのすこしだけのこつていた
水を、ぐいとのみほした。

「へえ！」と、ぼくは王子くんにいった。「たいへんけつこ
うな思いで話だけど、まだひこうきがなあってないし、もう、
のむものもない。ぼくも、ゆっくりゆーっくり水くみ場にあ
るいていけると、うれしいんだけど！」

「友だちのキツネが……」と、その子がいったけど、

「いいかい、ぼうや。もうキツネの話をしてるばあいじゃな
いんだ！」

「どうして？」

「のどがからからで、もうすぐ死んじゃうんだよ……」

その子は、ぼくのいいぶんがわからなくて、こういった。

「友だちになるっていいことなんだよ、死んじゃうにしても。」

ぼく、キツネと友だちになれてすつごくうれしくて……」

ぼくはかんがえた。『この子、あぶないってことに気づい
てない。はらぺこにも、からからにも、ぜったいならん
だ。ちよつとお日さまがあれば、それでじゅうぶん……』

ところが、その子はぼくを見つめて、そのかんがえにへん
じをしたんだ。

「ぼくだつて、のどはからからだよ……井戸をさがそう……」

ぼくは、だるそうにからだをうごかした。井戸をさがすな
んて、ばかばかしい。はてもしれない、このさばくで。それ
なのに、そう、ぼくたちはあるきだした。

ずーっと、だんまりあるいていくと、夜がおちて、星がぴ
かぴかしはじめた。ぼくは、とろんとしながら、星をながめ
た。のどがからからで、ぼうつとする。王子くんのことばが
うかんでは、ぐるぐるまわる。

「じゃあ、きみものどがからから？」と、ぼくはきいた。

でも、きいたことにはこたえず、その子はこういっただけ
だった。

「水は、心にもいいんだよ……」

ぼくは、どういうことかわからなかったけど、なにもいわ
なかった……きかないほうがいいんだと、よくわかっていた。

その子はへとへとだった。すわりこむ。ぼくもその子のそ
ばにすわりこむ。しーんとしたあと、その子はこうもいった。

「星がきれいなのは、見えない花があるから……」

ぼくはへそうだねとへんじをして、月のもと、だんまり、

すなのでこぼをながめる。

「さばくは、うつくしい。」と、その子はことばをつづけた……

まさに、そのとおりだった。ぼくはいつでも、さばくがいしかった。なにも見えない。なにもきこえない。それでも、なにかが、しんとするなかにも、かがやいている……

王子くんはいった。「さばくがうつくしいのは、どこかに井戸をかくしてるから……」

ぼくは、どきとした。ふいに、なぜ、すながかがやいてるのか、そのなぞがとけたんだ。ぼくが、ちいさなおとこの子だったころ、古いやしきにすんでいた。そのやしきのいいつたえでは、たからものがどこかにかくされているらしい。もちろん、だれひとりとして、それを見つけてないし、きつと、さがすひとさえいなかった。でも、そのいいつたえのおかげで、その家まるごと、まほうにかかったんだ。その家にかくされたひみつがある。どこか、おくそこに……

「そうか。」と、ぼくは王子くんにいった。「あの家とか、あの星とか、あのさばくが気になるのは、そう、なにかをうつくしくするものは、目に見えないんだ！」

「うれしいよ。」と、その子はいった。「きみも、ぼくのキツネとおなじこといってる。」

王子くんがねつくと、ぼくはすぐさま、その子をだっこして、またあるきはじめた。ぼくは、むねがいっぱいだった。なんだか、こわれやすいたからものを、はこんでるみたいだ。きつと、これだけこわれやすいものは、ちきゅうのどこにも

ない、ときえかんじる。ぼくは、月あかりのもと、じっと見た。その子の青白いおでこ、つむった目、風にゆれるふさふさのかみの毛。ぼくはこうおもう。ここで見てるのは、ただのへからゝ。いちばんだいじなものは、目に見えない……ちよっとくちびるがあいて、その子がほえみそうになった。そのとき、ぼくはつづけて、こうかんがえていた。『ねむってる王子くんに、こんなにもぐつとくるのは、この子が花にまっすぐだから。花のすがたが、この子のなかで、ねむってても、ランプのほのおみたく、きらきらしてるから……』そのとき、これこそ、もっともつとこわれやすいものなんだ、って気がついた。この火を、しっかりまもらなくちゃいけない。風がびゅんとふけば、それだけできえてしまう……そうして、そんなふうにあるくうち、ぼくは井戸を見つけた。夜あけのことだった。

25

王子くんはいった。「ひとつて、はやいきかんしゃにむちゅうだけど、じぶんのさがしものはわかってない。ということは、そわそわして、ぐるぐるまわってるだけ。」

さらにつづける。

「そんなことしないでいいのに……」

ぼくたちが行きあたった井戸は、どうもサハラさばくの井戸っぽくはなかった。さばくの井戸っていうのは、さばくのなかで、かんたんな穴がぼこつとあいてるだけ。ここにある

のは、どうも村の井戸っぽい。でも、村なんてどこにもないし、ぼくは、ゆめかとおもった。

「おかしい。」と、ぼくは王子くんに行った。「みんなそろってる。くるくる、おけ、ロープ……」

その子はわらって、ロープを手にとり、くるくるをまわした。するときいきいと音がした。風にごぶさたしてる、かざみどりみたいな音だった。

へその子はわらって、ロープを手にとり、くるくるをまわした。V



「きこえるよね。」
と王子くんはいった。「ぼくらのおかげで、この井戸がめざめて、うたをうたってる……」
ぼくは、その子にむりをさせたくなかった。

「かして。」と、ぼくはいった。「きみには、きつすぎる。」
そろりそろり、ぼくは、おけをふちのところまでひっぱり上げて、たおれないよう、しっかりおいた。ぼくの耳では、くるくるがうたいつづけていて、まだゆらゆらしてる水の上では、お日さまがふるえて見えた。

「この水がほしい。」と王子くんがいった。「のませてちょうだい……」

そのとき、ぼくはわかった。その子のさがしものが！

ぼくは、その子の口もとまで、おけをもちあげた。その子は、目をつむりながら、ごくつとのんだ。おいわいの日みたいに、気もちよかった。その水は、ただののみのものは、まったくべつのものだった。この水があるのは、星空のしたにあるいて、くるくるのうたがあって、ぼくがうでをふりしぼったからこそなんだ。この水は、心にいい。プレゼントみただ。ぼくが、ちいさなおとこの子だったころ。クリスマスツリーがきらきらしてて、夜ミサのおんがくがあって、みんな気もちよくにこにこしてたからこそ、ぼくのもらった、あのクリスマスプレゼントは、あんなふうに、きらきらかがやいていたんだ。

王子くんがいった。「きみとこのひとは、5000本ものバラをひとつの庭でそだててる……で、さがしものは見つからない……」

「見つからないね。」と、ぼくはうなずく……

「それなのに、さがしものは、なにか1りんのバラとか、ちよつとの水とかのなかに見つかったりする……」

「そのとおり。」と、ぼくはうなずく。

王子くんはつづける。

「でも、目じゃまつくらだ。心でさがさなくちゃいけない。」

ぼくは水をのんだ。しんこきゅうする。さばくは、夜あけ

で、はちみつ色だった。ぼくもうれしかった、はちみつ色だったから。もう、むりをしなくてもいいんだ……

「ねえ、やくそくをまもってよ。」と、王子くんはぼつりといって、もういちど、ぼくのそばにすわった。

「なんのやくそく？」

「ほら……ヒツジのくちわ……ぼくは、花におかえししなくちゃなんないんだ！」

ぼくはポケットから、ためしにかいた絵をとりだした。王子くんはそれを見ると、わらいながら、こういった。

「きみのバオバブ、ちよつとキャベツっぽい……」

「えっ！」

バオバブはいいできだとおもっていたのに！

「きみのキツネ……この耳……ちよつとツノっぽい……ながすぎるよ！」

その子は、からからとわらった。

「そんなこといわないでよ、ぼうや。ぼくは、なかの見えないうボアと、なかの見えるボアしか、絵つてものをしらないんだ。」

「ううん、それでいいの。子どもはわかってる。」

そんなわけで、ぼくは、えんぴつでくちわをかいだ。それで、その子にあげただけで、そのとき、なぜだか心がくるしくなった。

「ねえ、ぼくにかくれて、なにかしようとしてる……？」

でも、その子はそれにこたえず、こう、ぼくにいった。

「ほら、ぼく、ちきゅうにおっこちて……あしたで1年にな

るんだ……」

そのあと、だんまりしてから、

「このちかくにおっこちたんだ……」

といって、かおをまっ赤にした。

そのとき、また、なぜだかわからないけど、へんになしいう気もちになった。それなのに、ぼくはきいてみたくなかったんだ。

「じゃあ、1しゅうかんまえ、ぼくときみがであつたあのあさ、きみがあんなふうに、ひとのすむところのはるかかなた、ひとりっきりであるいていたのは、たまたまじゃないってこと!? きみは、おっこちたところに、もどってるんだね？」

王子くんは、もつと赤くなった。

ぼくは、ためらいつつもつづけた。

「もしかして、1年たったら……？」

王子くんは、またまたまっ赤になった。しつもんにはこたえなかったけど、でも、赤くなるってことは、へうんVっていつてるのとおんなじってことだから、だから。

「ねえ！」と、ぼくはいった。「だいじょうぶ……？」

それでも、その子はこたえなかった。

「きみは、もう、やることをやらなくちゃいけない。じぶんのからくりのところへかえらなきゃいけない。ぼくは、ここであつて。あしたの夜、かえってきてよ……」

どうしても、ぼくはおちつけなかった。キツネをおもいだしたんだ。だれであっても、なつけられたら、ちよつとないてしまうものなのかもしれない……

井戸のそばに、こわれた古い石のかべがあった。つぎの日の夕がた、ぼくがやることをやってもどつてくると、とおくのほうに、王子くんがそのかべの上にすわって、足をぶらんとさせているのが見えた。その子のはなしごえもきこえてくる。

「じゃあ、きみはおぼえてないの？」と、その子はいった。

「ちがうって、ここは！」

その子のことばに、なにかがへんじをしているみたいだった。た。

「そうだけど！ そう、きょうなんだけど、ちがうんだって、ここじゃないんだ……」

ぼくは、かべのほうへあるいていった。けれど、なにも見えないし、なにもきこえない。それでも、王子くんはまたことばをかえしていた。

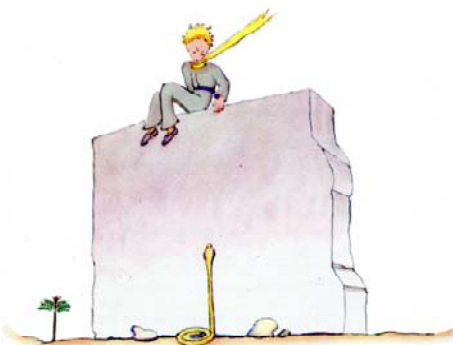
「……そうだよ。さばくについた、ぼくの足あとが、どこからはじまつてるかわかるでしょ。きみはまつただけでいいの。ぼくは、きょうの夜、そこにいるから。」

ぼくは、かべから20メートルのところまできたけど、まだなにも見えない。

王子くんは、だんまりしたあと、もういちどいった。

「きみのどくは、だいじょうぶなの？ほんとに、じわじわくるしまなくてもいいんだよね？」

ぼくは心がくるしくなって、たちどまったけれど、どうしてなのか、やっぱりわからなかった。



「とにかく、もう行ってよ。」と、その子はいった。「……ぼくは下りたんだ！」v

そのとき、ぼくは気になって、かべの下のあたりをのぞきこんでみた。ぼくは、

とびあがった。なんと、そこにいたのは、王子くんのほうへシャーっとかまえている、きいろいヘビが1ぴき。ひとを30びょうでころしてしまいうやつだ。ぼくはピストルをうとうと、けんめいにポケットのなかをさぐりながら、かけ足でむかった。だけど、ぼくのたてた音に気づいて、ヘビはすなのなかへ、ふんすいがやむみたいにな、しゅるしゅるとひっこんでしまった。それから、いそぐようでもなく、石のあいだを力シャカシャとかるい音をたてながら、すりぬけていった。

ぼくは、なんとかかべまで行って、かろうじてその子を見つけた。ぼくのぼうや、ぼくの王子くん。かおが、雪のように青白い。

「いったいどういうこと！ さっき、きみ、ヘビとしゃべってたよね！」

ぼくは、その子のいつもつけているマフラーをほどいた。こめかみをしめらせ、水をのませた。とにかく、ぼくはもうなにもきけなかった。その子は、おもいつめたようすで、ぼくのことをじっと見て、ぼくのくびにすがりついた。その子のしんぞうのどきどきがたわつてくる。てっぼうにうたれて死んでゆく鳥みたい、よわよわしい。その子はいう。

「うれしいよ、きみは、じぶんのからくりになりにくいものを見つけたんだね。もう、きみんちにかえってゆけるね……」

「どうして、わかるの？」

ぼくは、ちょうど知らせにくるところだった。かんがえてたよりも、やるべきことがうまくいったんだ、って。

その子は、ぼくのきいたことにはこたえなかったけど、こうつづけたんだ。

「ぼくもね、きょう、ぼくんちにかえるんだ……」

それから、さみしそうに、

「はるかにずっとおいところ……はるかにずっとむずかしいけど……」

ぼくは、ひしひしとかんじた。なにか、とんでもないことがおころうとしている。ぼくは、その子をぎゅっとだきしめた。ちいさな子どもにするみたいに。なのに、それなのに、ぼくには、その子がするつとぬけで、穴におちてしまうような気がした。ぼくには、それをとめる力もない……

その子は、とおい目で、なにかをちゃんと見ていた。

「きみのヒツジがあるし、ヒツジのためののはこもあるし、くちわもある……」

そういって、その子は、さみしそうにほえんだ。

ぼくは、ただじっとしていた。その子のからだ、ちょっとずつほてっていくのがわかった。

「ぼうや、こわいんだね……」

こわいのは、あたりまえなのに！ でも、その子は、そつとわらって、

「夜になれば、はるかにずっとこわくなる……」

もうどうしようもないんだっておもうと、ぼくはまた、ぞつとした。ぼくは、このわらいごえが、もうぜったいにきけないなんて、どうしても、うけいれることができなかった。

このわらいごえが、ぼくにとって、さばくのなかの水くみ場のようなものだったんだ。

「ぼうや、ぼくはもつと、きみのわらいごえがききたいよ……」

でも、その子はいった。

「夜がくれば、1年になる。ぼくの星が、ちょうど、1年まえにおっこちたところの上にくるんだ……」

「ぼうや、これはわるいゆめなんだろ？ ヘビのことも、会うことも、星のことも……」

でも、その子は、ぼくのきいたことにこたえず、こういった。

「だいじなものっていうのは、見えないんだ……」

「そうだね……」

「それは花もおんなじ。きみがどこかの星にある花をすきになったら、夜、空を見るのがこちよくなる。どの星にもみんな、花がさいてるんだ……」

「そうだね……」

「それは水もおんなじ。きみがぼくにのませてくれた水は、まるで音楽^{おんがく}みたいだった。くるくるとロープのおかげ……そうでしょ……よかったよね……」

「そうだね……」

「きみは、夜になると、星空をながめる。ぼくんちはちいさすぎるから、どれだかおしえてあげられないんだけど、かえって、そのほうがいいんだ。ぼくの星っていうのは、きみにとっては、あのたくさんの中のひとつ。だから、どんな星だって、きみは見るのがすきになる……みんなみんな、きみの友だちになる。そうして、ぼくはきみに、おくりものをするんだよ……」

その子は、からからとわらった。

「ねえ、ぼうや、ぼうや。ぼくは、そのわらいごえが大すぎなんだ！」

「うん、それがぼくのおくりもの……水とおんなじ……」

「どういうこと？」

「ひとには、みんなそれぞれにとっての星があるんだ。たびびとには、星は目じるし。ほかのひとにとっては、ほんのちいさなあかりにすぎない。あたまのいいひとにとっては、しらべるものだし、あのしごとになげんにとっては、お金のものと。でも、そういう星だけど、どの星もみんな、なんにもい

わない。で、きみにも、だれともちがう星があるんだよ……」

「どういう、こと？」

「夜、空をながめたとき、そのどれかにぼくがすんでるんだから、そのどれかでぼくがわらってるんだから、きみにとっては、まるで星みんながわらってるみたいになる。きみには、わらってくれる星空があるってこと！」

その子は、からからとわらった。

「だから、きみの心がいたら（ひとの心はいつかはいえるものだから）、きみは、ぼくとであえてよかったっておもうよ。きみは、いつでもぼくの友だち。きみは、ぼくといっしょにわらいたくてたまらない。だから、きみはときどき、まどをあける、こんなふうに、たのしくなりたくて……だから、きみの友だちはびっくりするだろうね、じぶんのまえで、きみが空を見ながらわらってるんだもん。そうしたら、きみはこんなふうにいる。『そうだ、星空は、いつだってぼくをわらせてくれる！』だから、そのひとたちは、きみのあたまがおかしくなるとおもう。ぼくはきみに、とってもたちのわるいいたずらをするってわけ……」

そして、からからとわらった。

「星空のかわりに、からからわらう、ちいさなすずを、たくさんあげたみたいなものだね……」

からからとわらった。それからまた、ちゃんとしたこえで。

「夜には……だから……来ないで。」

「きみを、ひとりにはしない。」

「ぼく、ぼろぼろに見えるけど……ちょっと死にそうに見え

るけど、そういうものなんだ。見に来ないで。そんなことしなくていいから……」

「きみを、ひとりにはしない。」

でも、その子は気になるようだった。

「あのね……へビがいるんだよ。きみにかみつくといけないから……へビっていうのは、すぐおそいかかるから、ほしいままに、かみつくかもしれない……」

「きみを、ひとりにはしない。」

でも、ふっと、その子はおちついて、

「そっか、どくは、またかみつくとときには、もうなくなってるんだ……」

あの夜、ぼくは、あの子がまたあるきはじめてことに気がつかなかった。あの子は、音もなくぬけだしていた。ぼくがなんとかおいつくと、あの子は、わき目もふらず、はや足であるいていた。あの子はただ、こういった。

「あつ、来たんだ……」

それから、あの子はぼくの手をとったんだけど、またなやみだした。

「だめだよ。きみがぎずつくだけだよ。ぼくは死んだみたいに見えるけど、ほんとうはそうじゃない……」



ぼくは、なにもいわない。

「わかるよね。とおすぎるんだ。ぼくは、このからだをもっていないんだ。おもすぎるんだ。」

ぼくは、なにもいわない。

「でもそれは、ぬぎすてた、ぬけがらとおんなじ。ぬけがらなら、せつなくはない……」

ぼくは、なにもいわない。

あの子は、ちよつとしずんだ。でもまた、こえをふりしぼった。

「すてきなこと、だよ。ぼくも、星をながめるよ。星はみんな、さびたくるくるのついた井戸なんだ。星はみんな、ぼくに、のむものをそそいでくれる……」

ぼくは、なにもいわない。

「すつごくたのしい！ きみには5おくのすずがあつて、ぼくには5おくの水くみ場がある……」

そしてその子も、なにもいわない。だって、ないていたんだから……

「ここだよ。ひとりで、あるかせて。」

そういつて、あの子はすわりこんだ。こわかったんだ。あの子は、こうつづけた。

「わかるよね……ぼくの花に……ぼくは、かえさなきやいけないんだ！ それに、あの子はすつごくかよい！ それに、すつごくむじゃき！ まわりからみをまもるのは、つまらない、よつつのトゲ……」

ぼくもすわりこんだ。もう立ってはいられなかった。あの
子はいった。

「ただ……それだけ……」

あの子はちよつとためらつて、
そのあと立ち上がった。1ぽだけ、
まえにすすむ。ぼくはうごけな
かった。

なにかが、きいろくひかっただ
けだった。くるぶしのちかく。あ
の子のうごきが、いっしゅんだけ
とまった。こえもなかった。あの
子は、そうつとたおれた。木がた
おれるようだった。音さえもしなかった。すなのせいだった。



△あの子は、そうつとた
おれた。木がたおれ
るようだった。▽



27

いまとなつては、あれももう、6年まえのこと。……ぼく
は、このできごとを、いままでだれにもはなさなかった。ひ
こうきなかまは、ぼくのかおをみて、ぶじにかえってきたこ
とをよろこんでくれた。ぼくは、せつなかつたけど、あいつ
らには、こういった。「いやあ、こりこりだよ……」

もういまでは、ぼくの心も、ちよつといえている。その、
つまり……まったくつてわけじゃない。でも、ぼくにはよく
わかつている。あの子は、じぶんの星にかえたんだ。だつ
て、夜があけても、あの子のからだは、どこにも見あたらな
かったから。からだは、そんなにおもくなかつたんだろう……
。そして、ぼくは夜、星に耳をかたむけるのがすきになつ
た。5おくのすずとおんなじなんだ……

でも、ほんとに、とんでもないこともおこってしまった。
くちわをあの王子くんにかいてあげただけど、ぼくはそれ
に、かわのひもをかきたすのをわすれていたんだ！ そんな
んじやどうやつても、ヒツジをつなぐことはできない。なの
で、ぼくは、かんがえこんでしまう。『あの子の星では、ど
ういうことになってるんだろう？ ひよつとして、ヒツジが
花をたべてやしないか……』

こうもかんがえる。『あるわけない！ あの王子くんは、
じぶんの花をひとばんじゅうガラスおおいのなかにかくし
て、ヒツジから目をはなさないはずだ……』そうすると、ぼ

くはしあわせになる。そして、星がみんな、そっとわらってくれる。

また、こうもかんがえる。『ひとつていうのは、1どや2ど、気がゆるむけど、それがあぶないんだ！ あの王子くんが夜、ガラスのおおいをわすれてしまったりとか、ヒツジが夜のうちに、こっそりぬけでたりとか……』そうすると、すずは、すっかりなみだにかわってしまふ……

すごく、ものすごく、ふしぎなことだ。あの王子くんが大好きなきみたちにも、そしてぼくにとつても、うちゅうつてものが、ただそのどこかで、どこかしらないところで、ぼくたちのしらないヒツジが、ひとつバラをたべるか、たべないかってだけで、まったくべつのもになってしまふんだ……空を見てみよう。心でかんがえてみよう。『あのヒツジは、あの花をたべたのかな？』そうしたら、きみたちは、まったくべつのものが見えるはずだ……

そして、おとなのひとは、
ぜったい、ひとりもわから
ない。それがすつごくだい
じなんだってことを！

これは、ぼくにとつて、
せかいでいちばんきれいで、
いちばんせつないけし
きです。さっきのページの
ものと、おなじけしきなん

ですが、きみたちによく見てもらいたいから、もういちどかきます。あのとときの王子くんが、ちじょうにあらわれたのは、ここ。それからきえたのも、ここ。

すっかり、このけしきを見てください。もし、いつかきみたちが、アフリカのさばくをたびしたとき、ここがちゃんとわかるように。それと、もし、ここをとおることがあったら、おねがいですから、たちどまって、星のしたで、ちよつとまってほしいんです！ もし、そのとき、ひとりの子どもがきみたちのところへ来て、からからとわらつて、こがね色のかみで、しつもんしてもこたえてくれなかったら、それがだれだか、わかるはずです。そんなことがあったら、どうか！ ぼくの、ひどくせつないきもちを、どうにかしてください。すぐに、ぼくへ、てがみを書いてください。あの子がかえってきたよ、つて……